

アジア・アフリカ言語文化研究所 東京外国語大学

RESEARCH INSTITUTE FOR LANGUAGES AND CULTURES OF ASIA AND AFRICA
TOKYO UNIVERSITY OF FOREIGN STUDIES

要覧 2004



目 次

概 要

| | |
|-----------------------------------|----|
| 所長あいさつ | 1 |
| 沿革 | 2 |
| 研究所組織 | 4 |
| 研究組織構成 | 5 |
| 研究活動の構成 | 6 |
| 研究スタッフ | 7 |
| 運営諮問委員 | 14 |
| 歳 出 | 15 |
| 情報資源利用研究センター | 16 |
| フィールドサイエンス研究企画センター準備室 (FSC準備室) | 18 |

共同利用

| | |
|--------------|----|
| 共同研究プロジェクト | 19 |
| 国際シンポジウム | 29 |
| 外国人研究者招へい | 31 |
| 外国研究機関との共同研究 | 32 |
| 図書資料コレクション | 34 |

研究・教育活動

| | |
|--------------------|----|
| 競争的研究経費などによる研究 | 35 |
| アジア書字コーパス拠点(GICAS) | 37 |
| 資源人類学プロジェクト | 38 |
| 長期研究者派遣 | 39 |
| 言語研修 | 40 |
| 音声学解析 | 41 |
| 大学院・学振特別研究員 | 42 |
| 研究成果の公開 | 43 |
| 出版事業・ホームページ | 44 |

表紙の写真

ホイアン歴史博物館入口内側。
ベトナム、ホイアンにて。
(澤田英夫所員撮影)

RESEARCH INSTITUTE FOR LANGUAGES AND CULTURES
OF ASIA AND AFRICA
TOKYO UNIVERSITY OF FOREIGN STUDIES

3-11-1, ASAHI-CHO, FUCHU-SHI, TOKYO 183-8534
TEL:042-330-5600 FAX:042-330-5610

所長あいさつ

「グローバル化」という概念の浸透により、世界が一続きのものであるという理解が広がりつつあります。しかし、このことは必ずしも言語や文化が画一化することや、特定集団が支配的な地位を占めることを意味するものではありません。

現実の世界は多様性に富んでおり、また各地域での異なる文化の接触は新たな文化を生み出しつつあります。多様性に富む諸集団が共生を目指すには、相互の理解が必要であり、そのためには人類の社会生活の基礎を成す言語、文化に関する個別的な研究と普遍的な研究の双方からのアプローチが必要とされます。

本研究所は、アジア・アフリカの言語文化に関する総合的研究を目的とする共同利用研究所として設置され、共同研究や海外調査の組織、研究資料の蓄積と公開、言語研修、辞典編纂などを通じて、この分野における主導的な役割を果たしてきました。

その研究活動は、欧米に比して依然として研究の進んでいない部分の多いアジア・アフリカの諸言語や文化に関する研究を進めて知識の集積を図るのみならず、それらの研究に基づいて新たな研究の枠組みを提供することに向けられています。このために、所員による研究を進めるとともに、国内外の研究者の共同研究を組織してきました。

多様性に満ちたアジア・アフリカ地域に対する認識を広め、これらの地域との共存を進める上でも、本研究所の役割は、ますますその重要性を増しつつあると同時に、これらの地域を基盤とした新たな知的枠組みの形成に対する期待も増大しつつあります。

2004年4月、本研究所の属する東京外国語大学も国立大学法人となりました。しかし、全国共同利用研究所である本研究所は、学術研究の本来の姿である開かれた知の体系を構築すべく、組織の枠にとらわれることなく国内外の研究者に広く開かれた研究所としての活動を展開する所存です。



東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所

所長 宮崎 恒二

沿革

第二次世界大戦後、バンドン会議などを通じて、日本の将来にとって、アジア・アフリカ諸国との相互理解、相互協力を進めていくことの重要性が認識されるようになりました。そこで、1961（昭和36）年、日本学術会議はこれら諸国についての研究を進めるための共同利用研究所を設立するよう政府に勧告し、1964（昭和39）年に、アジア・アフリカ言語文化研究所が、わが国では初めての人文科学・社会科学系の共同利用研究所として東京外国語大学に附置されました。

共同利用研究所としての本研究所は、全国のあるいは海外の研究機関に属する専門の研究者とともに共同研究を行い、これらの学者に設備や資料を提供することなどを通して、日本あるいは世界における人文・社会科学の研究の進展に寄与することを使命としてきました。

発足当初、本研究所ではアジア・アフリカの個別の地域についての深い理解を目指し、言語学・歴史学・民族学などの視点から密度の濃い研究がなされました。しかし、設立30年後には、既存の学問体系に依拠した個別的な研究分野を乗り越えた新しい学問・理論構築への要請が高まり、また情報処理技術の発達の中で、文字のみならず音声や画像を処理し、さらにこれらをひとつの情報ネットワークに統合化する研究が急速に進展してきたことを受けて、このような内外の情勢に対応し、学問研究においてより先導的な役割を果たすことが求められるようになりました。このため、1991年に研究所では、研究体制の抜本的見直しをおこない、従来の小部門制（及び1客員部門）から4大部門制（及び1客員部門）をとることとなりました。4大部門制では、言語を媒介として成立している文化を総合的に研究する体制を整え、また広域的なフィールドワークや共同研究を通して、幅広い研究者の英知を結集した研究、情報の統合的処理の理論と方法の開発を目指しました。情報ネットワーク化の目覚ましい技術革新に関しては、これを活用したアジア・アフリカの言語文化資料の情報資源化をめざし、1997（平成9）年度より附属情報資源利用研究センターを設置し、共同利用研究所に更なる発展をもたらしています。

1995（平成7）年度には、本研究所は文部省から「卓越した研究拠点（COE）」に指定され、「中核的研究機関支援プログラム」のもとで、設備の充実、国際シンポジウムの開催、研究資料のデータベース化とその発信などにつとめてきました。加えて、2001（平成13）年度には、5年にわたる中核的研究拠点形成プログラム（2002（平成14）年度からは、文部科学省科学研究費補助金特別推進研究に移行）「アジア書字コーパス拠点」が新たに発足し、従来にもましてアジア・アフリカ地域の言語文化研究において先導的役割を果たすことになりました。

2002（平成14）年度からは、文部科学省科学研究費補助金・特定領域研究「資源の配分と共有に関する人類学的統合領域の構築—象徴系と生態系の関連をとおして—」が発足しました。このプロジェクトでは、国内外の諸機関に属する多くの人文社会科学の研究者が参加することにより、人類社会における広義の資源の生成循環を考察し、近代社会の資源をめぐる諸問題に対する新たなパースペクティブを提供することを目指しています。

この他、1992年には、東京外国語大学に大学院地域文化研究科博士後期課程が設置されましたが、本研究所でも多くの教官がこれに加わり、本研究所の精神を受け継ぐ次世代の優秀な研究者の育成にも取り組んでいます。2002（平成14）年度には、21世紀COEプログラムとして地域文化研究科では、「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」および「史資料ハブ地域文化研究拠点」の2つのプログラムが採択され、本研究所の大学院担

当教員も、これらの拠点の形成に寄与しています。

さて、2004年4月に本研究所は法人化を迎え、これまで以上に、日本のそして国際的な人文社会科学研究をリードする研究拠点としての役割を強化していく必要性が高まっています。そこで、本研究所では、これまでの設置目的をさらに発展させて、以下の基本目標を掲げることとしました。

- (1) 臨地研究（フィールドサイエンス）を核とした国際的研究拠点として国際的水準の研究を先導するにふさわしい研究領域を設定し、国内外の共同研究プロジェクトを推進する。
- (2) アジア・アフリカ諸地域の言語・文化等に関する研究資料・情報を研究資源として利用可能な形に編纂し、それを国際的に共有するための研究資源拠点としての活動を進める。
- (3) 国内外の後継研究者の養成に努めるため、研究所の創設以来の歴史を持つ言語研修・研究技術研修・出版・広報活動の、いっそうの充実を図る。

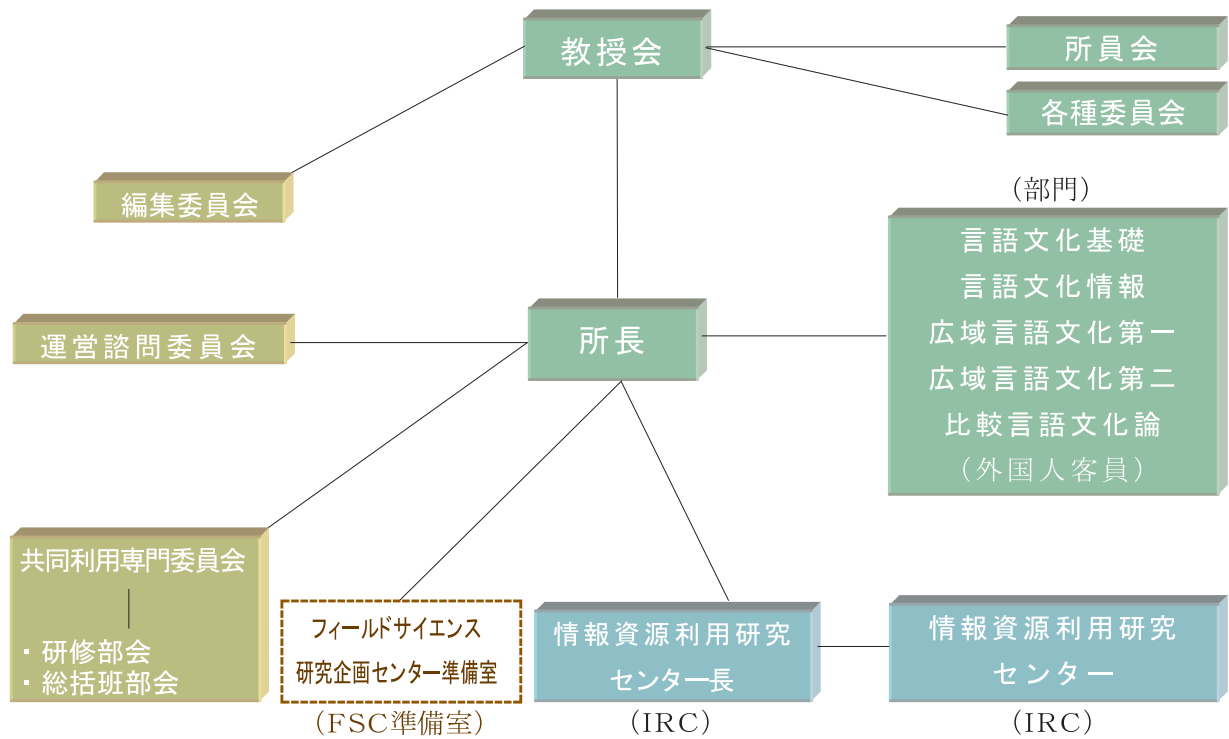
上記の基本的な目標の達成に資するために、研究所では今年度からフィールドサイエンス企画研究センター準備室を立ち上げ、臨地研究という視点から、国内外の一線の研究者を糾合した研究および研究企画を行っていきます。また、研究所では、全国の地域研究者のネットワーク形成に寄与すべく、「地域研究コンソーシアム」の立ち上げと運営にも積極的に関与しています。さらに、従来の部門制においてとかく固定化しがちであった所員の組織配置の欠を補完し、中期目標・計画に従って所員がより機動的に現下の研究課題に協力して取り組んでいくために、中期的なタイムスパンで所員が作る「ユニット」を単位として共同研究を推進していく体制を整えつつあります。

以上のいくつかの新しい試みを通して、本研究所は、これからもアジア・アフリカ世界に関する新たな認識枠組みの提供のための基盤形成に寄与すべく、よりいっそう活発な研究活動を展開していく決意です。

歴 代 所 長

| | |
|------|-------------|
| 岡 正雄 | 1964-1972 年 |
| 徳永康元 | 1972-1974 年 |
| 北村 甫 | 1974-1983 年 |
| 梅田博之 | 1983-1989 年 |
| 山口昌男 | 1989-1991 年 |
| 上岡弘二 | 1991-1995 年 |
| 池端雪浦 | 1995-1997 年 |
| 石井 溥 | 1997-2001 年 |
| 宮崎恒二 | 2001 年-現在 |

研究所組織



(2004年4月1日現在)

| 区分 | 教授 | 助教授 | 講師 | 助手 | 計 |
|----|-----------|-----|----|----|-----------|
| 定員 | (5) 19 | 18 | 0 | 5 | (5) 42 |

() は外国人客員数を外数で示す

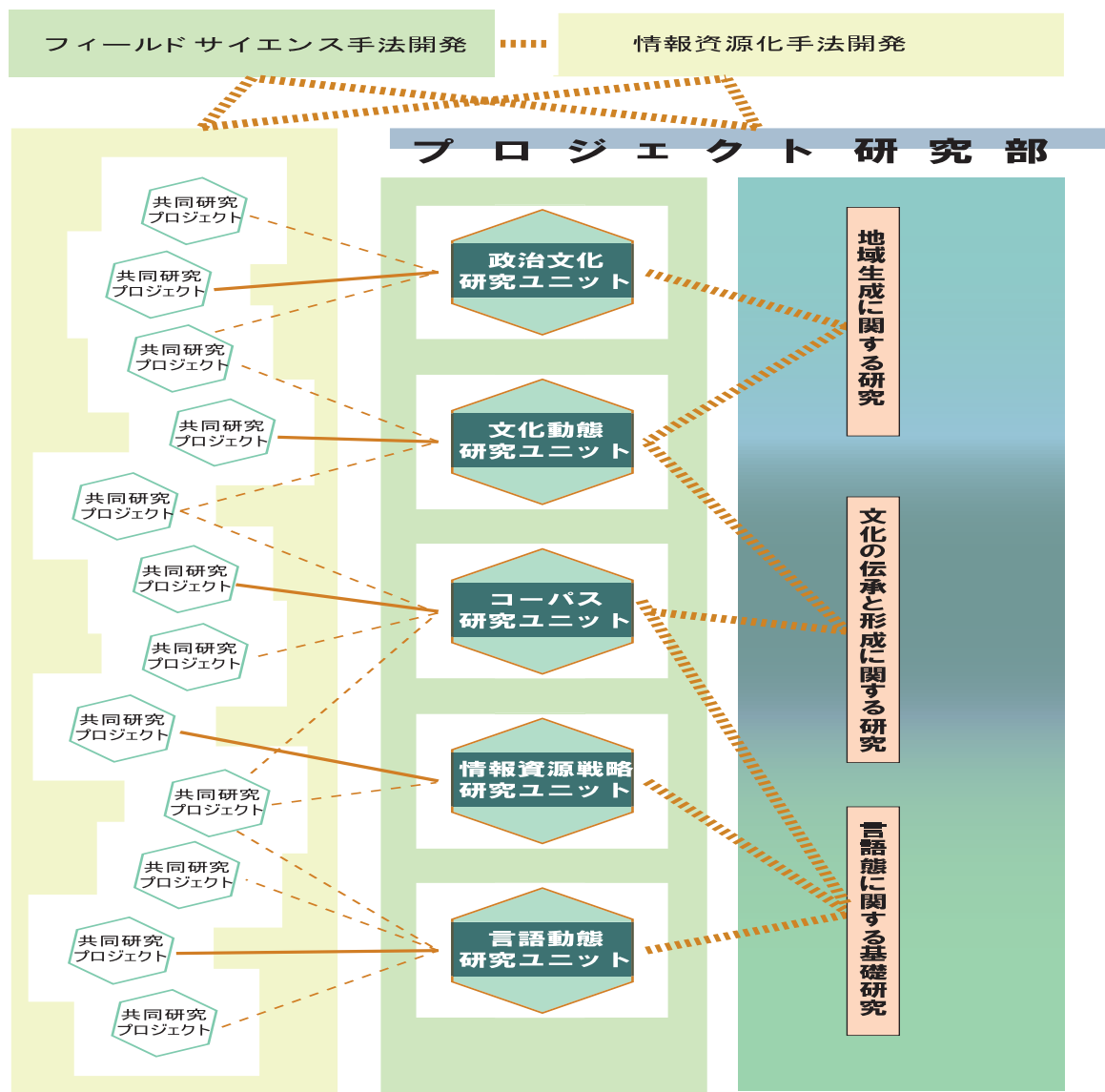
研究組織構成

| 部門名 | 研究分野 | 研究内容 | 所属研究者 |
|---------------------|--|--|---|
| 言語文化基礎 | 言語文化理論, 文化記号学, 文化・社会動態 | 言語文化学の構築を図るためにアジア・アフリカの言語文化を比較・分析し, 歴史学, 文化人類学, 言語学など関連諸研究分野の成果を統合して理論化する。 | 町田, 松下 飯塚, 真島, 河合, 西井 太田 |
| 言語文化情報 | 言語文化工学, 映像音声学, 言語情報処理, 文化情報処理, 情報開発(外国人研究員) | アジア・アフリカの言語文化情報の分析・処理と新しい情報処理システムの構築, および情報処理した言語文化情報の提供, 共同利用・公開のための手法を開発する。 | 加賀谷, 中見, 芝野, 中谷 菊澤, 豊島, 近藤 荒川, 伊藤 Razafiarivony, Michel (外国人研究員) |
| 広域言語文化 第一 | 東北アジア, 東アジア, 中央ユーラシア, 東南アジア・オセアニア, 南アジア(北部), 南アジア(南部)の各言語文化圏 | 東はオセアニアより西はフィンランドあるいはインド亜大陸までを対象とする。人, 物, 情報の移動, 流動化・多様化に対応し, 学際的研究をおこない, フィールドワークの成果を広域的な共同研究に集約するとともに, 収集した言語文化情報を「言語文化基礎」・「言語文化情報」大部門との連携で分析する。 | 石井, 新谷, ダニエルス, 高島, 峰岸(センター長/併任), 宮崎(所長/併任) 呉人, 三尾, 床呂, 根本, 星 陶安, 塩原 |
| 広域言語文化 第二 | 西アジア(アラブ), 西アジア(非アラブ), アフリカ(東部・南部), アフリカ(西部・中部)の各言語文化圏 | 西アジア, アフリカ言語文化圏を対象とする。人・物・情報の移動, 流動化・多様化に対応し, 学際的研究をおこない, フィールドワークの成果を広域的な共同研究に集約するとともに, 収集した言語文化情報を「言語文化基礎」・「言語文化情報」大部門との連携で分析する。 | 内堀, 小川, 羽田, 黒木, 高知尾, 永原, 深澤 |
| 比較言語文化論 (外国人研究員) | | 言語文化学の確立を図るために, 外国人研究者(特にアジア・アフリカ諸国)を客員教授として招へいし, 共同研究を推進する。 | Motingea, Andre Mangulu Mkude, Daniel Joseph Benhadda, Abderrahim |
| 情報資源利用研究センター | | アジア・アフリカ言語文化に関する情報資源の蓄積・加工・公開と, それを活用した共同研究手法の開発・国際学術交流を推進する。 | 栗原, バースカララオ 中山, 澤田, 小田 Witzel, Michael (外国人研究員) |

研究活動の構成

AA 研は、法人化のもとで掲げた長期的な基本的な目標（沿革参照）を遂行するために、三つの戦略的な研究軸に基づいて、動的な研究活動を推進します。すなわち、三つの研究軸を具体化させた中期計画・中期目標に基づいて、所員が活動の単位である「ユニット」に所属し、所内での共同研究を実施します。さらに、「ユニット」の活動に相応しい「共同研究プロジェクト」を立ち上げることによって、国内外のそれぞれの研究領域において最先端の研究を行っている研究者を共同研究員として委嘱し、アジア・アフリカの言語・文化についての先導的な共同研究を推進します。情報資源利用研究センターに所属する所員は、ユニットに関わる所員と同様に、共同研究を展開するとともに、所内外の研究における情報資源の蓄積・加工・公開と、それを利用した共同研究手法の開発も行います。フィールドサイエンス研究企画センター準備室所属の所員も、共同研究のほかに、現地研究を主体とするフィールドサイエンスの視点から、研究および研究企画を行っていきます。

AA研の研究活動概念図



研究スタッフ

1. 研究分野・領域
2. 今年度の研究課題
3. ホームページ

教 授

(2004年4月1日現在)

石井 溥 (ISHII, Hiroshi)

1. 南アジアの人類学
2. i. ネパールの社会変化および民族・カースト認識研究 ii. 北部南アジアの多言語状況研究 (科学研究費補助金) iii. 北部南アジアの社会動態研究 iv. 海外学術調査・フィールドワークの手法研究 (科学研究費補助金)
[通称「海外学術調査総括班」関連]
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~hishii/index.html>

内堀基光 (UCHIBORI, Motomitsu)

1. 東南アジア (オーストロネシア) 民族学
2. i. サラワク先住民の自然環境認識に関する現地調査 (科学研究費補助金) ii. マダガスカルにおける森の文化的意味の研究 (科学研究費補助金) iii. 日本人文化人類学者のフィールドワークの特性 (三菱財団研究補助金) iv. 資源に関する人類学的総合研究 (特定領域科学研究費補助金)
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~muc/>

小川 了 (OGAWA, Ryo)

1. 西アフリカの民族学
2. アジア・アフリカにおける小生産物の研究

加賀谷良平 (KAGAYA, Ryohei)

1. アフリカの言語学 (バントゥ諸語, コイサン諸語), 音声科学
2. i. ウガンダのバントゥ諸語の分析 ii. バントゥ諸語と日本語アクセントとの比較研究とその弁別特徴の研究
iii. 語彙集資料の作成

梶 茂樹 (KAJI, Shigeki)

1. アフリカの言語, 特にバンツ系諸語の研究
2. i. トーロ語などウガンダ西部の言語の研究 ii. tone の国際シンポジウムの開催
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~skaji/>

栗原浩英 (KURIHARA, Hirohide)

1. ベトナム現代史
2. i. 第二次世界大戦直後におけるソ連勢力圏の形成とスターリンの対外認識 (科学研究費補助金) ii. インターナショナルイズムの史的研究 iii. インドシナにおける複合回廊の形成と展望

芝野耕司 (SHIBANO, Kohji)

1. マルチメディアデータベース, 多言語情報処理, CALL
2. マルチメディアデータベース言語設計, 日本語組版, コンピュータ支援による言語教育環境及び e-learning 環境の研究

新谷忠彦 (SHINTANI, Tadahiko L.A.)

1. 言語音変化の類型的研究
2. i. シャン文化圏の総合的研究 ii. オセアニア諸語の研究

クリスチャン ダニエルズ (DANIELS, Christian)

1. 中国西南部：タイ文化圏の歴史

高島 淳 (TAKASHIMA, Jun)

1. 宗教学・インド宗教史 (ヒンドゥー教), 言語情報処理
2. i. シヴァ教の寺院儀礼と思想についての研究 ii. 多言語処理システムの開発研究 (科学研究費補助金) iii. インド聖典データベースの構築 (GICAS : 特別推進研究 (COE)) iv. インド系文字の発展に関する研究 (GICAS : 特別推進研究 (COE)) v. 中世インドのヒンドゥー教タントリズムと諸宗教のかかわりについての研究
3. <http://www3.aa.tufs.ac.jp/~tjun/index.html>

中谷 英明 (NAKATANI, Hideaki)

1. インド仏教学・中期インド語学・人間統合科学
2. 地球文明時代の世界理解と新しい倫理・人間観の研究 (AA 研共同研究プロジェクト)

中見立夫 (NAKAMI, Tatsuo)

1. 東アジア・内陸アジアの国際関係史
2. i. 「東アジアの社会変容と国際環境」プロジェクト (AA 研共同研究プロジェクト) ii. 中国清朝・民国時代の北京等都市における非漢語出版文化に関する社会史的研究 (科学研究費補助金) iii. 台湾中央研究院歴史語言研究所所蔵満洲語文書の研究 (サントリー財団)

羽田亨一 (HANEDA, Koichi)

1. サファヴィー朝期イラン文化史
2. i. 『ロスタム・ハーン史』の研究 ii. ラシードゥ・ウッディーン序・監修『タンスーク・ナーメ』(王叔和『脉訣』のペルシャ語訳本)の研究 iii. 「ペルシア語文化圏に於ける文字資料の収集と収集資料のデジタル化」(GICAS : 特別推進研究 (COE))

ペーリ・バースカララーオ (BHASKARARAO, Peri)

1. 南アジアの諸言語, 音声学
2. <http://www3.aa.tufs.ac.jp/~bhaskar/index.html>

町田和彦 (MACHIDA, Kazuhiko)

1. 南アジアの言語学
2. i. インド系文字の構造と歴史 (GICAS : 特別推進研究 (COE)) ii. ヒンディー語電子辞書 (GICAS)
3. <http://www3.aa.tufs.ac.jp/~kmach/>

松下周二 (MATSUSHITA, Shuji)

1. アフリカの言語
2. i. ハウサ語の方言と、リングァ・フランカとしてのハウサ語の伸張ダイナミズム ii. 西チャド語グループ言語の研究
3. <http://www3.aa.tufs.ac.jp/~mshuji/>

峰岸真琴 (MINEGISHI, Makoto)

1. 東南アジア、南アジアの言語学および言語類型論
2. i. 孤立語を視野に入れた言語基礎論の研究 ii. タイ系、クメール系など、東南アジアのインド系文字に関する研究 (GICAS: 特別推進研究(COE)) iii. タイ、インドの少数民族言語の研究 (「危機言語」科学研究費補助金) iv. 言語運用を基盤とする言語情報学拠点 (東京外国語大学 21 世紀 COE プログラム)
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/index-j.html>

宮崎恒二 (MIYAZAKI, Koji)

1. オーストロネシア社会
2. i. ボルネオ及びその周辺部における移民・出稼ぎの人類学的研究 (科学研究費補助金)
3. <http://www3.aa.tufs.ac.jp/~kmiya/profile-sjis.html>

助 教 授

飯塚正人 (IIZUKA, Masato)

1. イスラーム学・中東地域研究
2. i. 1990 年代半ば以降のイスラーム世界におけるジハード理論の変容と実践の研究 (科学研究費補助金) ii. 地域研究による「人間の安全保障学」の構築 (日本学術振興会 人文・社会科学振興のためのプロジェクト研究事業)
3. <http://www3.aa.tufs.ac.jp/~masato/index.html>

小田淳一 (ODA, Jun'ichi)

1. 計量文献学
2. i. 民話の計量的比較研究 ii. 情報修辞学 (AA 研共同研究プロジェクト) iii. 物語の自動生成 (総合研究大学院大学共同研究) iv. 文字法の認知学的研究 (GICAS: 特別推進研究(COE))
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~odaj/index.html>

河合香吏 (KAWAI, Kaori)

1. 人類学, 東アフリカ牧畜民研究
2. i. ウガンダ・カラモジャの牧畜民の空間認識と地図表象化に関する調査・研究 ii. 東アフリカ牧畜民の遊動再考 iii. 自然観・環境認識と身体論

菊澤律子 (KIKUSAWA, Ritsuko)

1. i. 言語学(比較統語論・言語接触と言語変化・言語類型論・文法記述) ii. オーストロネシア諸祖語の再建(とくに統語構造)と先史における民族移動 iii. フィジー語諸方言の記述 iv. タロイモに関する学際的研究
2. i. オーストロネシア諸語の人称代名詞に関する比較統語論的研究 ii. オセアニア諸語の格構造の変化 iii. マダガスカル諸言語の記述
3. <http://www3.aa.tufs.ac.jp/~ritsuko/>

呉人徳司 (KUREBITO, Tokusu)

1. 言語学, チュクチ語
2. i. 海岸チュクチとトナカイ・チュクチに関する言語学, 言語人類学的研究 ii. 消滅の危機に瀕している言語に関するより効率的調査・記述方法の研究 iii. 言語類型論の研究
3. <http://www3.aa.tufs.ac.jp/~tugusk/>

黒木英充 (KUROKI, Hidemitsu)

1. 中東地域研究・東アラブ近代史
2. i. オスマン期シリアの都市社会の変容過程に関する基礎研究 ii. 東地中海地域における人間移動と「人間の安全保障」 iii. オスマン帝国における国際・地域間コミュニケーション・システムの研究
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~kuroki/>

近藤信彰 (KONDO, Nobuaki)

1. イラン近代史
2. i. 宗教寄進文書の分析による 19 世紀テヘランの都市史研究 ii. シーア派ウラマーの法的勧告に関する研究 iii. ペルシア語文化圏における文字資料の収集と電子化(GICAS:特別推進研究(COE))

澤田英夫 (SAWADA, Hideo)

1. カチン州および東北インドのチベット・ビルマ系言語の記述的研究
2. i. ロンウォー語 (マル語) の文法記述 ii. 「東南アジア諸文字の源流と発展 (特にビルマ文字の体系や字形の変遷に関するデータベースの構築)」(GICAS:特別推進研究(COE))
3. <http://www3.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/profile-sjis.htm>

高知尾 仁 (TAKACHIO, Hitoshi)

1. 文化人類学・人類学精神史
2. i. 近代エチオピア表象論 ii. 啓蒙期の言語文化表象 iii. imperium の言説と表象に関する基本研究

床呂郁哉 (TOKORO, Ikuya)

1. 東南アジア島嶼部の人類学

豊島正之 (TOYOSHIMA, Masayuki)

1. 中世日本語文献学(特にキリシタン文献)
2. i. キリシタン文献活字字体のデータベース構築(科学研究費補助金) ii. 玉塵抄・韻府群玉の注被注関係の XML による表現と、それに基づくデータベース構築(科学研究費補助金) iii. 既刊「国語学」全文データベース構築(科学研究費補助金) iv. 三省堂「言語学大辞典」データベース構築(科学研究費補助金) v. 日本植民地期台湾の言語学・民族学資料についての整理・分析(AA 研共同研究プロジェクト・データベース構築プロジェクト(情報資源利用研究センター)・蔣経国国際学術交流基金会プロジェクト(台湾)) vi. 漢字字体史研究のための関連資料収集の継続(GICAS:特別推進研究(COE)) vii. 「主婦談話資料」「固有名詞資料」等, 昨年度の情報資源利用研究センタープロジェクトによるコーパス構築の継続と改良
3. <http://jcs.aa.tufs.ac.jp/mtoyo/>

永原陽子 (NAGAHARA, Yoko)

1. 南部アフリカの歴史・帝国主義・帝国の歴史
2. i. 南部アフリカ史における「クレオール」・「人種」・「境界」の研究 ii. 植民地時代のナミビア史の再構築
iii. 「植民地責任」論と脱植民地化の比較史的研究 (AA 研共同研究プロジェクトおよび科学研究費補助金)

中山俊秀 (NAKAYAMA, Toshihide)

1. ワカシュ語 (北米北西海岸), 形態・統語論, 言語類型論
2. i. ヌートカ語文法記述 ii. ヌートカ語テキスト資料の整理・分析・編集 (科学研究費補助金) iii. ニティナト語資料の整理・分析
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~nakayama/>

西井涼子 (NISHII, Ryoko)

1. 東南アジア大陸部の人類学
2. i. 南タイにおけるムスリム・仏教徒混住地域における実践宗教 ii. 人類学研究における「社会空間」についての考察 (AA 研共同研究プロジェクト「社会空間と変容する宗教」)
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~rnishii/>

根本 敬 (NEMOTO, Kei)

1. ビルマ近現代史
2. i. 日本占領期ビルマ(1942-45年)に関する総合的歴史研究 (AA 研共同研究プロジェクト・トヨタ財団計画助成研究) 主査としての企画・運営, ビルマにおける当時の関係公文書調査、および国際シンポジウム準備 ii. 「ビルマ地誌データベース構築」への取り組み iii. ビルマ通史の執筆 (単行本として出版予定) iv. 東部南アジア地域研究の一環としてのロヒンギャー問題調査
3. <http://coe.aa.tufs.ac.jp/knemoto/>

深澤 秀夫 (FUKAZAWA, HIDEO)

1. マダガスカルを中心とするインド洋海域世界の社会人類学的研究
2. i. マダガスカルにおける実地調査 (科学研究費補助金基盤研究A「地歩独立制移行期マダガスカルにおける資源をめぐる戦略と不平等の比較研究」) ii. マダガスカルにおける多言語状況についての論文執筆 iii. ホームページの改訂
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~nfuka/>

星泉 (HOSHI, Izumi)

1. チベット文化圏の言語学
2. i. チベット語辞典編纂 (GICAS: 特別推進研究(COE)) ii. チベット語動詞研究 (科学研究費補助金) iii. チベットの画像データベース構築プロジェクト (GICAS: 特別推進研究(COE)) iv. 古代チベット語文献オンライン (GICAS: 特別推進研究(COE))
3. <http://www3.aa.tufs.ac.jp/~hoshi/index.html>

真島一郎 (MAJIMA, Ichiro)

1. 西アフリカの人類学
2. i. 個体形成論集の総論執筆 ii. セネガル学生運動史における「1968年5月事件」の研究 iii. コートディヴォワール村落地域での住み込み調査 iv. シェイク・アンタ・ディオブとヨロ＝ラゴ教の関わりをめぐる研究
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~imajima/>

三尾裕子 (MIO, Yuko)

1. 東アジアの人類学
2. i. 台湾漢人の社会変動と宗教についての研究 ii. 日本植民地期台湾の言語学・民族学資料についての整理・分析(GICAS：特別推進研究(COE)・蔣経国国際学術交流基金会プロジェクト(台湾)) iii. ベトナム華人研究及び「環中国海(環シナ海)の文書史料の電子化(GICAS：特別推進研究(COE))」 iv. 「中国系移民の土着化／クレオール化／華人化についての人類学的研究」(AA 研共同研究プロジェクト, 科学研究費基盤研究(A)) v. 旧日本植民地における日本認識の研究(澁澤民族学振興基金)
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~ymio/>

助 手

荒川慎太郎 (ARAKAWA, Shintaro)

1. 西夏語学, 西夏語文献学
2. 西夏語仏教文献の言語学的研究

伊藤智ゆき (ITO, Chiyuki)

1. 音韻論, 中期朝鮮語, 中国語中古音
2. 朝鮮漢字音の音韻体系研究

太田信宏 (OTA, Nobuhiro)

1. 南アジアの歴史
2. i. 近世南アジアにおける国家的儀礼と政治文化の研究 ii. 南インド史上の商人集団の社会的結合形態とその歴史の変遷の研究 iii. ヒンドゥー教僧院所蔵文書の調査

塩原朝子 (SHIOHARA, Asako)

1. 言語学, インドネシア諸言語記述的研究
2. i. スンバワ語記述文法作成 ii. ウダヤナ大学所蔵バリ語ロンタル文書の転写, 分析, 翻訳(科学研究費補助金)
3. <http://www3.aa.tufs.ac.jp/~asako/profile-sjis.htm>

陶安あんど (HAFNER, Arnd Helmut)

1. 中国法制史と法社会学
2. i. 旧中国固有の法理論の解明 ii. 中国法典形成史の構築(文化論的な法理解に基づく法典編纂史再考。科学研究費補助金) iii. 中国律学現存著作目録の編集(中国社会科学院・法学研究所との共同プロジェクト) iv. 金文の初歩的研修

非常勤研究員

衣笠聡史 (KINUGASA, Satoshi)

1. 生態人類学, 空間情報科学
2. アジア・アフリカ地域の人間活動と環境変化
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~kinugasa/>

宋丕尤 (SONG, Peiyou)

1. スーパーコンピュータによる分散処理
2. 多国言語 Web 辞書
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~song/index.html>

チュクチの少女

ロシアの極北地方に暮らすチュクチの少女。五年前私が彼女が住む村を訪れた時は小学校一年生だったが、昨年五年ぶりに現地に行くと、すっかり表情豊かなお姉ちゃんになっていた。私が最初声をかけたときは少し照れていたが、少し話しをすると、自然の微笑みがこぼれ、おまけに民族の伝統踊りまで踊って見せた。

極地のツンドラという厳しい自然環境のもとでトナカイを追って遊牧するチュクチ人は今、伝統文化の伝承が急務になりつつある。

(2003年8月ロシア連邦チュクチ自治管区にて。呉人徳司撮影)



馬頭琴を弾く若者

(2004年9月、中国内蒙古、フフホト市にて。荒川慎太郎撮影)

運営諮問委員

研究所の日常の業務の運営は、教授・助教授で組織する教授会においておこなわれますが、共同利用研究所としての機能を適切に遂行するために、これとは別に運営諮問委員会が置かれ、研究所の運営の基本方針など重要な事項について、所長の諮問に応えます。運営諮問委員には所外の学識経験者など15名以内が委嘱されます。2003年4月～2005年3月の運営諮問委員は現在以下の通りです。

| | | | |
|-------|------------------------------------|------|---------------------|
| 石井米雄 | 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構長 (京都大学名誉教授) | 長野泰彦 | 国立民族学博物館教授 |
| 上野善道 | 東京大学教授 | 原ひろ子 | 放送大学教授 |
| 大塚和夫 | 東京都立大学教授 | 林 寛爾 | 日本経団連社会本部企業・社会グループ長 |
| 大塚柳太郎 | 東京大学教授 | 毛里和子 | 早稲田大学教授 |
| 坂村 健 | 東京大学教授 | 渡邊興亞 | 国立極地研究所長 |



シャン料理店の店内、ビルマ、マンダレーにて
(高島淳撮影)



タナカー（ゲキツキ）の木とそれを擦りおろす石盤を商う女性たち
ビルマ、ザガイン、カウナムドーパゴダ境内（高島淳撮影）

歳出

国立学校特別会計（平成15年度まで）

(単位：千円)

| 区分 | 平成12年度 | 平成13年度 | 平成14年度 | 平成15年度 |
|--------------|---------|---------|---------|---------|
| (項) 研究所 | 912,492 | 937,040 | 729,003 | 717,870 |
| 人件費 | 534,997 | 532,662 | 463,689 | 466,365 |
| 物件費 | 377,495 | 404,378 | 265,314 | 251,505 |
| (項) 施設整備費 | | 18,585 | 0 | 0 |
| (項) 国立学校 | 7,482 | 9,560 | 8,234 | 8,564 |
| (項) 産学連携等研究費 | 2,220 | 9,427 | 36,551 | 39,406 |
| 計 | 922,194 | 974,612 | 773,788 | 765,840 |

外部資金受入状況

科学研究費補助金

(単位：千円) ※間接経費を含む

| 区分 | 平成12年度 | | 平成13年度 | | 平成14年度 | | 平成15年度 ※ | |
|------------------------------|--------|--------|--------|---------|--------|---------|----------|---------|
| | 件数 (件) | 金額 | 件数 (件) | 金額 | 件数 (件) | 金額 | 件数 (件) | 金額 |
| 特別推進研究 (COE) (COE 形成基礎研究) | | | 1 | 90,000 | 1 | 130,000 | 1 | 136,240 |
| 特定領域研究 | 4 | 7,000 | 6 | 11,200 | 9 | 41,900 | 4 | 40,800 |
| 基盤研究(A) | 8 | 59,700 | 6 | 62,010 | 7 | 66,690 | 7 | 76,180 |
| 基盤研究(B) | 1 | 4,700 | 1 | 3,500 | 2 | 4,100 | 4 | 12,100 |
| 基盤研究(C) | 1 | 1,500 | 2 | 3,300 | 4 | 6,100 | 5 | 6,900 |
| 奨励研究(A) | 3 | 2,900 | 1 | 800 | | | | |
| 萌芽研究 | | | | | | | 1 | 800 |
| 若手研究(B) | | | | | 3 | 4,000 | 5 | 7,100 |
| 計 | 17 | 75,800 | 17 | 170,810 | 26 | 252,790 | 27 | 280,120 |

奨学寄附金

(単位：千円)

| 区分 | 平成12年度 | | 平成13年度 | | 平成14年度 | | 平成15年度 | |
|-------|--------|-------|--------|-------|--------|--------|--------|-----|
| | 件数 (件) | 金額 | 件数 (件) | 金額 | 件数 (件) | 金額 | 件数 (件) | 金額 |
| 奨学寄附金 | 1 | 4,000 | 2 | 6,800 | 2 | 10,400 | 1 | 200 |



1. 設置目的

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所情報資源利用研究センター(Information Resources Center / ILCAA, 略称 irc-ILCAA)は、アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源の蓄積・加工・公開と、それを活用した共同研究手法の開発、国際学术交流の推進を目的として、10年の時限で、平成9(1997)年度に設置されたものです。

2. 研究所とセンター

本研究所は、従来から、アジア・アフリカの諸言語のデータをコンピュータ化し、それぞれの言語の音韻論的・統語論的・語彙論的分析をおこなうとともに、歴史的・民族的・社会学的研究等、多目的な用途に供するデータベースの充実を図ってきました。このデータベースは、本研究所の最も重要な事業のひとつである、アジア・アフリカの諸言語の辞典・文典の編纂の基礎資料を提供し、かつ全国の研究者の共同利用に供されています。

3. 活動の指針

センターは、上記のようなこれまでの研究所の活動を基礎に、10年間で、下記の点で、理論・技術の整備・洗練をおこなうことをめざしています。

(a) アジア・アフリカの言語文化に関するコンテンツ公開の場として

所内には、上記のような言語データだけでなく、アジア・アフリカの言語文化に関する多様な資料(パンフレット、ポスター、フィルム、8ミリ、ビデオ、録音テープ等)が豊富に所蔵されています。このデータの所内・所外での利用は必ずしも容易ではなく、公開に向けた整備が緊要です。

(b) 国際的共同研究の場として

データベースを国際的に公開・共有し、それに基づく研究支援の環境をつくり、国際的共同研究の効率化と内容の充実を図ることをめざしています。

(c) コンテンツ蓄積・交換に関する基礎理論の整備母体として

通時的文字論を考慮した文字コード(符号化文字集合)論、多言語処理論、多表記系(スクリプト)の照合(collation)・整形・組版基礎理論等、従来、理論的な整備がほとんどない分野を理論化することは急務といえます。また、多表記系(スクリプト)混在での input methods, 整形・組版結果の交換プロトコル等、まだ仕様自体が不安定な分野の仕様の洗練、さらには、画像・動画・音声抽象検索などのマルチメディア系での input methods とインタフェースにも、今後積極的に関与していく予定です。

4. 今年度の主な研究事業

今年度もセンター運営費によるデータベース構築、言語文化に関する一次資料の資源化のためのプロジェクトが進行しています。その一例をあげると、「北米インディアン諸語音声」(代表：中山俊秀)、ニブフ語音声資料のデジタル化などがあります。

この他に、以下のような本研究所で進行中の競争的研究費による研究活動、および外部団体との共同研究事業にも積極的に支援を行っています。

(1) 文部科学省・COE 形成基礎研究費『アジア書字コーパスに基づく文字情報学の創成』(代表：

ペーリ・バースカララーオ)

(2) 文部科学省・データベース科研費『三省堂言語学大辞典』(代表：町田和彦)

(3) 産学連携共同研究『多言語機械翻訳システムの評価研究』(共同研究クラス A, 代表：町田和彦)

(4) 新エネルギー・産業技術開発機構 (NEDO) との共同研究『多言語処理技術の基盤整備』(代表：星泉)

(5) 国際情報化協力センター (CICC) との共同研究『イスラーム関連サイト収集プロジェクト』(代表：飯塚正人)

5. デジタル言語文化館

センターの研究活動の成果を世界に向けて発信するため、センターではインターネット上に「デジタル言語文化館」を開館しました。この「デジタル言語文化館」は、単なるコンテンツの羅列ではなく、その加工技術・呈示技術とその背景の理論化自体もコンテンツとなる点が特徴であり、蒐集展示と、蒐集資料・技術の工具利用の両方がおこなえるところが、従来のデジタルライブラリ(電子図書館)発想を包含しつつ、それを越える点です。

コンテンツには「タロ芋データベース」「ヒンディー語形態素解析・辞書」「言語調査票」「カイロの肖像・19世紀」「ヒンディー語テキストコーパス」「チベット地図／人名・地名索引」など多数あります。今後も一層コンテンツを充実させていきますのでどうぞご期待ください。

6. 技術と研究の相互発展

センターは、望まれる技術の要求仕様を策定するのであって、技術自体を開発する場ではありません。望まれる技術とは、新しい技術の呈示によって技術への需要自体を呼びおこし、その結果、新たな研究工具を提供することで研究開拓のきっかけとなるような技術であり、すなわち、今は「技術的制約によって無理」と諦められ、研究分野自体が研究として認識されていないものを、明らかにするような技術を指します。

研究者の主體的発想による技術仕様の策定は、本センターのように、言語・歴史・民族・情報の各分野の専門研究者を擁し、技術と研究の相互刺戟を主眼として研究を進める専門機関によって、はじめて生れ得る成果と言えましょう。



フィールドサイエンス研究企画センター準備室（FSC）

【目的】

本研究所は、臨地調査にもとづくアジア・アフリカ地域の言語文化の総合的研究を目的としてるところです。フィールドサイエンス研究企画センター(略称FSC)は、研究手法としての臨地調査の開発と、調査関連データの体系的蓄積、調査に関わる研究者間の連携を担うため、部内措置によって平成17年度の設置を目指しています。当準備室は、平成16年度においてFSC設置のための地ならしにあたっています。

【活動の指針】

設立後のフィールドサイエンス研究企画センターの活動には、次の5つの柱があります。

(1) 研究手法の開発

海外での臨地調査に関わる手法を実践的・理論的に開発することを、FSCの研究に関わる業務活動とします。とくに中東・イスラーム地域での臨地調査の研究がいかにあるべきか、を重点課題とします。

(2) 研修事業

上記の成果の社会還元の一部として、研究手法に関わる研修を実施し、研修生を公募します。

(3) 海外学術調査総括班の実績の継承と展開

「海外学術調査総括班」は、1964年以来、本研究所に事務局をおきつつ、他機関に所属する研究者と協力して組織され、科学研究費補助金(海外学術調査)にかかわる研究者・研究組織間、および研究者側と日本学術振興会との間の情報交換、連絡調整などの活動を行っています。活動の主なものとしては、海外学術調査の研究組織の代表者を集めて情報交換を行う「研究連絡会」の開催、国際情勢に即応した調査を可能にするための「学術研究体制調査のための海外派遣」、および『海外学術調査ニューズレター』の広報などです。今後、FSCを中心として「総括班」の実績を継承し、さらに展開してゆくこととなります。URLは、<http://www.aa.tufs.ac.jp/~gisr/index-j.html>

(4) 地域研究コンソーシアムとの連携

「地域研究コンソーシアム」は、教育研究組織のみならずNGOも含めた幅広いアカデミック・コミュニティに立脚して、地域研究関連情報を蓄積し、その成果を広く社会に問うことなどを目的としています。AA研は、北海道大学スラブ研究センター、京都大学東南アジア研究所、国立民族学博物館地域研究企画交流センターとともにワーキング・グループを形成して、このコンソーシアムの設立準備に当たってきました。コンソーシアムは2004年4月26日に設立集会を開き、発足しました。全国共同利用研究所として、AA研はこうした協議体の連携活動のなかで大きな役割を果たしてゆくこととなりますが、FSCはその窓口として機能します。

(5) 現地研究拠点の設置

上記(1)～(4)の活動を効果的に遂行するため、複数の海外現地研究拠点を設置する準備を進めます。とくに中東・イスラーム地域を重点的にカバーし、わが国におけるこの地域の研究の一拠点となることを目指します。

【組織】

FSC準備室は形式上、以下の2つの研究班から構成されています。

(1) フィールド研究班

(2) 連携地域研究班

2つの研究班が協力してFSCの立ち上げに向けて1年間の活動を行ないます。

共同研究プロジェクト

全国共同利用研究所である本研究所にとって、所員が中心となって所外の研究者と共同で推進する共同研究プロジェクトは、最も大切な研究業務のひとつです。

これまで数多くのプロジェクトが組織され、約 400 点におよぶ出版物をはじめとして多様な研究成果をあげています。

また、1996 年度からは、従来の研究分野を越えた斬新な共同研究を推進するプロジェクトに重点的に予算を配分し、重点プロジェクトと位置づけて運営することになりました。最初の重点プロジェクトとして「東南アジアにおける人の移動と文化の創造」が組織され、国際シンポジウムをおこなうなど、活発な研究活動が展開されてきました。1997 年度には、さらに「音韻に関する通言語的研究」プロジェクトが、また 2000 年度からは「アジア・アフリカにおける政治文化の動態」が組織されました。

さらに 2000 年度からは、研究所の共同利用性を高めるために、専門知識を有する所外の研究者に代表をお願いして運営するプロジェクトを開始しました。これまでに、「浅井・小川未整理資料の分類・整理・研究」が実施されました。

本年度おこなわれるプロジェクトは次のとおりです。

重点共同研究プロジェクト

音韻に関する通言語的研究

(主査：梶 茂樹/所員 16, 共同研究員 46)

言語学の本来の研究分野は、音韻、形態、統語、意味であるが、そのなかでも音韻論は、長らく他の研究分野をリードしてきた。本研究プロジェクトは、音韻論のなかでも声調(tone)・アクセントを中心とする超分節素(suprasegmentals)の研究をおこなう。

世界に、声調言語は意外と多い。中国語諸方言やチベット・ビルマ系諸語、またベトナム語、タイ語などの東南アジア諸語、バンツ系やクワ系などのニジェール・コンゴ諸語、マサイ語やナンディ語などのナイル系諸語、南部アフリカのコイ・サン諸語、またアフロ・アジア系の中でもチャディック諸語、さらにはニューカレドニア諸語やアメリカ・インディアン諸語など。また、日本語やインド・ヨーロッパ系のスウェーデン語やセルボ・クロアチア語などのピッチ・アクセント諸語の研究も重要である。

具体的な研究テーマとしては、声調、音調、アクセントなどの用語の整理と同時に、次のようなものが考えられる。

- | | |
|--------------------------|----------------------|
| (1) 声調 (正確にはピッチ) の音声学的特性 | (5) 声調言語とアクセント言語との違い |
| (2) 子音、母音といった分節素 との関係 | (6) 世界の声調言語のタイポロジー |
| (3) 個々の言語における声調の体系 | (7) 声調の通時的変化と比較研究 |
| (4) 声調の語彙的、文法的機能 | (8) 声調の発生と消滅 |

| | | | | |
|-------------------------|-------|-------|------|------|
| 鮎澤孝子 | 池田 巧 | 生駒美喜 | 市田泰弘 | 伊藤英人 |
| 岩田 礼 | 上田広美 | 上野善道 | 遠藤光暁 | 大江孝男 |
| 岡崎正男 | 加藤昌彦 | 角谷征昭 | 上岡弘二 | 神谷俊郎 |
| 木部暢子 | 久保智之 | 窪菌晴夫 | 郡 史郎 | 坂本恭章 |
| 品川大輔 | 清水克正 | 杉藤美代子 | 鈴木玲子 | 田中伸一 |
| 壇辻正剛 | 中井幸比古 | 中嶋幹起 | 中西裕樹 | 中野暁雄 |
| 長尾美武 | 長野泰彦 | 新田哲夫 | 早田輝洋 | 原口庄輔 |
| 平山久雄 | 福井 玲 | 堀 博文 | 前田 洋 | 松森晶子 |
| 箕浦信勝 | 藪 司郎 | 湯川恭敏 | 米田信子 | 吉田浩美 |
| SMITH, Donna M Erickson | | | | |

一般共同研究プロジェクト

東アジアの社会変容と国際環境

(主査：中見立夫／所員 3, 共同研究員 33)

近年における国際情勢の変化と学术交流の発展によって、われわれ歴史学研究者は東アジア各地域の文書館・図書館などに所蔵される一次資料に対し、以前とは比べられないほど容易に接近できるようになった。さらに、現地学界でも、あらたな歴史評価・研究動向がおこり、われわれの研究への刺激となっている。ただ対象とすべき史料の量が多すぎて、その実態を体系的に把握してはいない。

また、個別の研究が深化するとともに、より大きな視野のもとに、問題をとらえなおし、分析枠組みを再検討することも必要である。さらに海外学界との共同研究、史料調査も、双方にとって、より具体的に実りの多い形で推進しなければならない。

本プロジェクトでは、このような研究状況を念頭におきながら、18世紀から20世紀初頭の東アジア世界各地における社会の変容が、外部世界とどのように有機的に関連していたかという問題を中心にすえ、文書史料によりそれがどこまであきらかにできるか検討する。東アジアに関する史料と研究情報の開かれたフォーラムをめざしている。

毎回テーマをかえながら、海外からのゲスト・スピーカーもまじえ、シンポジウム形式で研究会を開催し、また『東アジア史資料叢刊』などの出版物も刊行している。本年度は、日露戦争期の東アジア国際関係史に関するシンポジウム、および日本所在朝鮮王朝時代古文書の研究会を行う予定。

| | | | | |
|--------|------|-------|------|------|
| 赤嶺 守 | 石井 明 | 石川 禎浩 | 井上 治 | 井村哲郎 |
| 江夏由樹 | 岡 洋樹 | 岡本隆司 | 尾形洋一 | 小野和子 |
| 笠原十九司 | 加藤直人 | 川島 真 | 貴志俊彦 | 岸本美緒 |
| 楠木賢道 | 佐々木揚 | 新免 康 | 菅原 純 | 寺山恭輔 |
| 西村成雄 | 萩原 守 | 浜下武志 | 原 暉之 | 平野 聡 |
| ブレンサイン | 細谷良夫 | 松川 節 | 松重充浩 | 毛里和子 |
| 森川哲雄 | 柳澤 明 | 吉澤誠一郎 | | |

西南中国非漢族の歴史に関する総合的研究

(主査：クリスチャン・ダニエルス／所員 4, 共同研究員 16)

今まで本プロジェクトにおいて、(1) 西南中国非漢族の歴史に関する研究発表と(2) 史(資)料の発掘・収集・整理 という基本目的に沿って研究を進めてきた。2003年度に完成された《貴州苗族林業契約文書匯編》第三卷史料編・研究編に続き、2004年度において、16世紀から19世紀まで雲南南部の山地解発を重点的に研究する。実地調査によって収集された碑文などの史料の分析を通じて、漢族が山地に移住して生態系を改変した歴史過程を明らかにする予定である。

| | | | | |
|------|------|-------|-------|------|
| 井上 徹 | 上田 信 | 菊池秀明 | 岸本美緒 | 末成道男 |
| 武内房司 | 多田狷介 | 谷口房男 | 張 士 陽 | 塚田誠之 |
| 寺田浩明 | 林謙一郎 | 吉澤誠一郎 | 吉野 晃 | 渡辺佳成 |
| 渡部 武 | | | | |

インド洋海域世界の発展的研究

(主査：深澤秀夫／所員 2, 共同研究員 15)

本プロジェクトにおいては、個別文化・社会の研究の成果を、8世紀頃に成立した<インド洋海域世界>の歴史的展開過程についての通事的研究に導き入れること、またその通事的視点を共時的な個別文化・社会研究に再還流することの可能性を検討する。<インド洋海域世界>についてのこのような双方の視点による考察は、局所的には地域研究に寄与するのみならず、グローバル化する現代世界の中における多元・多文化的な人の在り方に対し、具体的な共存モデルの提示をも招来するものである。

| | | | | |
|------|------|------|-------|------|
| 秋道智彌 | 飯田 卓 | 飯田優美 | 川床睦夫 | 崎山 理 |
| 杉本星子 | 高桑史子 | 田中耕司 | 富永智津子 | 花渕馨也 |
| 堀内 孝 | 松浦 章 | 森山 工 | 門田 修 | 家島彦一 |

社会空間と変容する宗教

(主査：西井涼子／所員 7, 共同研究員 15)

人類学においては個人対社会、主観対客観といった二項対立的な問題設定を前提としていることが多い。この共同研究プロジェクトは、こうした前提を超えて、いかに人々の経験のリアリティを捉えることができるのかについての、人類学的な理論的展望をひらくことを目的とする。ここでいう社会空間とは、主体の実践のスペース、もしくは実践において他者と相互作用しつつ構築する社会関係の総体をさす。そこにおいては、実践主体はいかに重層する諸関係とかかわりながら自己を維持し構成するのかが問題となる。そこからあらためて、社会的なるものが問われることになる。このような社会科学の中心的ともいえる課題を追求するために、研究会は人類学者を中心としながらも、心理学、社会思想等の隣接分野の研究者の参加をあおぎ、学際的な共同作業による理論の構築をめざす。

| | | | | |
|-------|-------|------|-------|------|
| 青木恵理子 | 今村仁司 | 岩谷彩子 | 高木光太郎 | 高崎 恵 |
| 田中雅一 | 田邊繁治 | 田村愛理 | 土佐桂子 | 名和克郎 |
| 西本陽一 | 平井京之介 | 本田 洋 | 箭内 匡 | 矢野秀武 |

日本占領期ビルマ(1942-45)に関する総合的歴史研究

(主査：根本 敬／所員 2, 共同研究員 8)

本プロジェクトは、日本占領期のビルマ(1942-45年)に関する歴史を、政治・経済・軍事・農業・文化・民衆動向・少数民族・従軍慰安婦の諸角度から実証的な検証を加え、総合的に理解することを目的としている。その際、占領されたビルマ側に重点を置きつつ、占領した日本側の意図と占領政策の実態についても十分に注目するつもりである。

トヨタ財団の計画助成(1年目・2年目・3年目合計1,324万円)を受けながら、ビルマ、英国、米国での資料調査を実施し、また、聞き取りを中心とする国内調査もおこなう。

研究会は聞き取り調査と合わせて実施する予定である。なお、3年計画であるが、委任経理金との関係から4年計画に延長する。4年度目の今年、最終成果報告国際シンポジウムを2004年10月に開催し、さらに成果刊行物出版に向けた準備を具体的に進めていく(一部はすでに進展中)。この他、国内における聞き取り調査も継続する。成果出版は2005年度の予定(英文および和文の論文集、インタビュー記録集、資料集の3種)。

| | | | | |
|------|-------|-------|------|------|
| 池田一人 | 伊野憲司 | 岩城高広 | 内山史子 | 高橋昭雄 |
| 武島良成 | 南田みどり | 森川万智子 | | |

修辞学の情報学的再考

(主査：小田淳一／所員 6, 共同研究員 18)

古典修辞学の諸部門の中で19世紀まで存続したのは「表現法(elocutio)」のみであるが、20世紀半ばから始まった修辞学の復権は表現法を、テキストを構成する諸要素間の範列的及び連辞的關係におけるコード変換の技法として、実体的な要素単位に対して直接作用する操作であると見なすに至っている。

本プロジェクトは言語表現、音楽表現、映像表現、身体表現等の作り手、またそれらの表現を分析している研究者を共同研究員及び研究協力者に加え、芸術の美的価値をある構造の関数として記述するという、一元的な芸術＝形式論に基づく「形式的構造の研究」としての一般修辞学を情報学的に考察することによって、様々な形式を持つ言語文化情報に偏在する修辞学的技法のレパートリーを明らかにすることを目的とする。

2004年度は、今までの研究会で報告された、諸々のテキスト(音楽、映像を含む)における修辞学の関与可能性から、実践的かつ汎用的な修辞計算モデルの構築をめざす。

| | | | | |
|-------|-------|-------|------|------|
| 青柳悦子 | 石井 満 | 宇佐美隆憲 | 内海 彰 | 小方 孝 |
| 金井明人 | 上村龍太郎 | 佐藤みどり | 往住彰文 | 永崎研宣 |
| 永野光浩 | 難波雅紀 | 西尾哲夫 | 平井 覚 | 堀内正樹 |
| 松本みどり | 水野信男 | 良峯徳和 | | |

間大西洋アフリカ系諸社会における20世紀〈個体形成〉の比較研究

(主査：真島一郎／所員 4, 共同研究員 32)

21世紀転換期の人文社会系諸学でこれまでに発現をみてきたさまざまな思潮の底流にあるのは、西欧近代の市民原理に裏打ちされ相互に交錯しつつ成立した三様のレヴェルにおける歴史主体—〈国家〉〈民族〉〈個人〉—のありようを複数の視角から根本的に問いなおしていく、主体の問いなおし作業にほかならなかった。

本プロジェクトがめざすのは、このうち国家や民族の“揺らぎ”とは対照的に主体としての権利づけが複数性のうちでつねに代補・更新されつつ、非西洋世界における記憶、声、身体、ジェンダー、あるいはクレオール、ディアスポラ、サバルタン、マイノリティ、市民(市民社会、世界市民…)といった数々の言説空間の中で中核を占めてきた第三の主体概念〈個人〉の位置づけについて、20世紀・間大西洋アフリカ系諸社会における特定の個人々の生の深みにまでさかのぼった具体の場からこれを問いなおし、比較検討していく作業である。アフリカ大陸・島嶼部の諸社会、カリブ・中南米のアフロ系諸社会、およびアメリカ合州国のアフリカ系コミュニティを対象とする人類学、歴史学、政治学、文学など多分野の研究者から構成された共同研究によりその際とくに焦点が当てられるのは、自己による自己の生を通じた表象形成と、他者による他者の情報を介した表象形成との交叉点で成立する、〈個体化＝個体形成 individualization〉の歴史・文化的動態となるだろう。

2005年度の成果公表にむけ、最終年度にあたる来年度に論集執筆の準備会合を数回ひらき、論文の単なる寄せ集めではない、共同研究の完成形態としての論集刊行をめざす。

| | | | | |
|-------|------|------|-------|-------|
| 阿部小涼 | 荒井芳廣 | 岩田晋典 | 梅屋 潔 | 遠藤 貢 |
| 大辻千恵子 | 大森一輝 | 落合雄彦 | 北川勝彦 | 工藤多香子 |
| 栗本英世 | 小池郁子 | 崎山政毅 | 佐久間寛 | 佐々木孝弘 |
| 佐藤 章 | 柴田佳子 | 鈴木 茂 | 鈴木慎一郎 | 砂野幸稔 |
| 武内進一 | 竹中興慈 | 中條 献 | 津田みわ | 中林伸浩 |
| 浜 邦彦 | 樋口映美 | 星埜守之 | 松田素二 | 溝辺泰雄 |
| 矢澤達宏 | 渡辺公三 | | | |

文法記述の方法の研究

(主査：中山俊秀／所員 2, 共同研究員 7)

個別言語の文法構造の記述は、良くも悪くも「客観的事実の前理論的列記」と考えられることがある。そのために、記述に携わるものも、またその記述を形式理論構築に活用するものも、当の記述の理論的含みに対して無反省、無批判であることが多い。しかし実際には、「記述」という作業は高度に理論的な考察、決断の積み重ねであり、そうしてまとめられた文法は理論的に中立な事実の羅列ではありえない。とすれば、対象言語の本質を真に捉えた記述というものは、記述の枠組み、分析の単位、用いられる基本概念などを注意深く検討、規定する過程を通らなくては達成しえない。そこで、このプロジェクトでは、文法記述に携わっている研究者が集まり、文法記述に際してさまざまなレベルでなされなければならない理論的考察および決断の数々を意識的に見据え、検討していく。

なお、このプロジェクトでは、できるだけ問題を深く掘り下げ、実際の記述に即した議論、検討を進めるため、少人数での集中研究会の形式をとる。

| | | | | |
|------|------|------|------|------|
| 阿部優子 | 蝦名大助 | 加藤昌彦 | 笹間史子 | 江畑冬生 |
| 笹原 健 | 月田尚美 | | | |

Studies on African Languages

(主査：松下周二／所員 3, 共同研究員 18)

本プロジェクトは、アフリカ大陸を、サハラ以北・以南、東アフリカ・西アフリカ等のように分断することなくとらえ、種々の語族、国家、民族とかかわるアフリカの諸言語を、広い視野から分析・考察していくことを目的としている。

現地調査に基づく、地道ながらもオリジナルな研究を主流としつつ、文献・資料に基づく緻密な考察をも加え、さまざまな歴史・文化の交錯するアフリカの言語の実情を、多彩な研究者の間で共有し、明らかにしていきたい。

具体的な活動計画：

- 1) 年間3乃至4回の研究会を開き、2～3名による口頭発表およびそれに基づく討論を行なう。
- 2) 研究会では、自由発表のほか、その回のテーマを設定し、共同研究員や研究協力者に、個別の言語のデータを提示してもらい、それらをもとにディスカッションを行なうという形式も考えている。
- 3) 研究会の成果は、発表者による、AA研 Journal 等への投稿を要請する等、紙媒体での公表はもちろんのこと、本プロジェクトのウェブサイトを整備し、すみやかにウェブ上で公開していく。
- 4) 本プロジェクトのウェブサイトでは、研究会で口頭発表されたものでなくとも、アフリカの言語研究に関する論文や書評等を積極的に受理・公開する。
- 5) その他、共同研究員等から寄せられた、アフリカ言語学やそれに関連する学会等の情報を、ウェブサイトにおいて告知していく。
- 6) ウェブサイトと並行して、メーリング・リストによる迅速な情報交換を行なう。
- 7) ときには、在日アフリカ人等を交えた懇親の場を設け、広い意味での異文化交流も図っていきたいと考えている。

| | | | | |
|------|------------------|------|----------------------|------|
| 安部麻矢 | 阿部優子 | 神谷俊郎 | 小森淳子 | 榮谷温子 |
| 佐藤道雄 | 塩田勝彦 | 砂野幸稔 | 竹村景子 | 柘植洋一 |
| 中野暁雄 | 中村博一 | 日野舜也 | 宮本律子 | 米田信子 |
| 若狭基道 | Philips, John E. | | Ratcliffe, Robert R. | |

土地・自然資源をめぐる認識・実践・表象過程

(主査：河合香吏／所員 6, 共同研究員 9)

本研究プロジェクトは、アジア・アフリカの諸社会において土地や自然資源をめぐる現在進行しつつある状況を、利用や所有にかんする形態や制度論にとどまることなく、さまざまな生活の文脈において生起する人びとの具体的な実践から、その生活世界を統合的に把握することによって解析するものである。

土地は、名づけられ、語られ、歴史を付与されたものであるとともに、生活実践の場として、そこに身をおき、身体をもって働きかける、あるいは見、聞き、ふれることによって身体において「知る」対象であるといった意味において、身体性とも深くかかわる。こうした土地、およびこれに付随する自然資源は、外在的な認識の対象にとどまらず、人びとにとって「生きられる世界の全体」としてあつかいうる。このような視点を採用することによって、土地や自然資源をめぐる認識・実践・表象という問題系を、実用主義と主知主義、実体論と象徴論の二項対立的な図式をこえて、身体、記憶、歴史、他者といった要素を取りこみながら「生」の全体を包括した文化・社会理論を構築するための方法論と解析手法として提示することが可能となる。

本プロジェクトでは、土地・自然資源の利用や領有の実態、および認識と表象過程についておのの社会のおかれた状況をふまえて比較検討する。さらに、土地や自然資源をめぐる人びとの多彩な実践を、具体的な「生」の現場としての土地をめぐる自然観・環境認識の問題系としてあつかい、民族の歴史や集団間関係、国家政策との関係をもふくめた「生」の現場から再考察することを目指す。

プロジェクト最終年度となる3年目は、1、2年目の討論・成果をふまえ、本プロジェクトの目的である言語文化と自然ないし生態とを結びつけうる統合的な議論の場の開拓に向け、新たな視点と方法論を具体的に提示してゆきたい。

| | | | | |
|------|------|------|-------|------|
| 梅崎昌裕 | 北村光二 | 衣笠聡史 | 小松かおり | 椎野若菜 |
| 杉山祐子 | 津村宏臣 | 寺嶋秀明 | 吉村郊子 | |

言語基礎論の構築

(主査：峰岸真琴／所員 4, 共同研究員 7)

現代の言語理論は西欧諸語の研究に深く根ざしたものを中心に展開されてきた。西欧語型の言語理論の枠組みが多く非ヨーロッパ的言語の理論的考察に広く適用されていく中で、言語構造のタイプの違いからくる分析上の問題点は多く指摘されてきたが、これまでは、結局、従来理論の完成度の問題として対処され、西欧語型理論が基礎をおく前提概念、カテゴリーに対して具体的な反省が及ぶことはなかった。また、記述言語学者の側も、個々の言語記述において、そのような伝統的前提概念やカテゴリーを、十分に反省を加えることなく、基本的枠組みとして踏襲することが決して少なくなく、その結果、それぞれの言語の特徴に即した記述であるべきものが、はからずも「西欧語から見た記述」になってしまっていることも多い。

本プロジェクトでは、従来の言語理論、言語記述のあり方を問い直し、言語研究の新しい展開のための基盤を作ることを目的とする。そのために、現行および過去の言語理論について、その基礎概念、カテゴリーを再検討し、通言語的視野に立った枠組みの可能性を検討する。

| | | | | |
|------|-------|-----|-------|------|
| 加藤重広 | 佐久間淳一 | 沈 力 | 藤原加奈江 | 町田 健 |
| 初山洋介 | 吉田一彦 | | | |

社会文化動態の比較研究—北部南アジアの動きから

(主査：石井 溥／所員 1, 共同研究員 23)

人類学において比較研究は不可欠であるが、それを方法として確立することは大変に難しい。これは静態の比較についてすでに言われているが、動態の比較はさらに大きな問題である。しかし揺れ動く世界の中にある社会文化を把握しようとする場合、動態の比較は、分析の視点として大いに重要である。

ここでは、北部南アジア〔インド(南部4州以外)、パキスタン、バングラデシュ、ネパール、ブータン〕を主な対象地域とし、その諸側面の変化を捉え、相互の比較を行いつつ分析を深める。北部南アジアは英植民地権力の影響が直接的であった地域と間接的であった地域を含み、宗教的にも多様で、また、近年、経済自由化、「民主化」、あるいは独特の国民形成などの多様な国家レベルの変化を経験している。

本共同研究では、このような地域における社会文化変化の分析とその比較をとおして、人類学研究における比較方法の洗練を目指す。

| | | | | |
|------|-------|-----------------------|------|------|
| 今井史子 | 上杉妙子 | 鹿野勝彦 | 小牧幸代 | 佐藤齊華 |
| 橋 健一 | 田辺明生 | 外川昌彦 | 中谷純江 | 中谷哲弥 |
| 名和克郎 | 幅崎麻紀子 | 三尾 稔 | 南真木人 | 宮本万里 |
| 森本 泉 | 八木祐子 | 安野早己 | 山上亜紀 | 山本真弓 |
| 山本勇次 | 渡辺和之 | Maharjan, Keshav Lall | | |

無文字社会における「むかし」を知るには?—無文字社会の過去を知るための研究

とその手法開発

(主査：加賀谷良平／所員 5, 共同研究員 22)

2003年度は、「むかし」に関するこれまでの様々な研究方法のその成果を考察してきた。16年度は、(1)「もの」に関する技術の開発／伝播や、持続してきた文化・社会での前後関係、相互関係からの「むかし」を検討したい。さらに、(2)各研究分野からの成果である出来事史等を、分野を超えて相互的補完をし、(3)その地域、その時期での空間・時間認識について考察したい。

| | | | | |
|------|------|-------|-------|-------|
| 飯田 卓 | 池谷和信 | 井関和代 | 上田富士子 | 神谷俊郎 |
| 亀井哲也 | 慶田勝彦 | 佐々木重洋 | 佐藤 俊 | 竹沢尚一郎 |
| 鳥山 寛 | 中野暁雄 | 西田正規 | 日野舜也 | 藤井麻湖 |
| 堀 信行 | 丸尾 稔 | 三木 亘 | 森口恒一 | 吉田憲司 |
| 米田信子 | 和田正平 | | | |



「テヘラン・バーザール地区のキャラヴァンサライ」

「Caravansarai in Tehran Bazar」(2004年8月、テヘランにて、近藤伸彰撮影)

イスラーム写本・文書資料の総合的研究

(主査：羽田亨一／所員 3, 共同研究員 20)

イスラーム世界で著され、記された歴史的文化的遺産である写本・文書資料の総合的研究を目的としている。アラビア語、ペルシア語、オスマン・チャガタイ両トルコ語の写本・文書が主な対象となる。

写本、文書の利用は今日の学界ではあたりまえのこととなっているが、写本・文書資料利用のための方法論については十分な議論が尽くされないまま、進んでいるのが現状である。そこで、現在、日本の各地で行われている写本研究・文書研究をネットワーク化し、写本学、古文書学を踏まえた研究会を積み重ね、相互の知見を交換する。

また、少人数からなる作業グループを編成し、写本・文書資料の校訂、翻訳を推進する。成果は可能な限り、研究所の出版物として刊行する。

| | | | | |
|------|------|-------|-------|------|
| 赤坂恒明 | 磯貝健一 | 江川ひかり | 大河原知樹 | 大稔哲也 |
| 小野 浩 | 久保一之 | 後藤敦子 | 清水和裕 | 高松洋一 |
| 林佳世子 | 真下裕之 | 間野英二 | 守川知子 | 森本一夫 |
| 家島彦一 | 矢島洋一 | 山口昭彦 | 川本正知 | 中町信孝 |

中国系移民の土着化／クレオール化／華人化についての人類学的研究

(主査：三尾裕子／所員 2, 共同研究員 16)

本研究では、海外中国人（本研究では、地政学的な「中国」の外に移住した中国系の人々を指す用語として用いる）を対象に、海外中国人を同質的、単一的に表象する従来の人文・社会科学の諸研究に共通した分析視点を批判的に再検討し、新たな海外中国人像（華人／チャイニーズ・クレオール等）や「民族」概念を再構築することを目的とする。具体的には、以下の諸点を明らかにする。

- (1) 従来の諸研究において代表的な海外中国人として表象されてきた、ホスト社会の中で経済的・文化的ヘゲモニーを掌握した都市在住の「華人（所謂現地国籍を取得した中国人意識を持った人々）」だけではなく、マイノリティ、あるいは周縁的存在となり、現地化が進んだチャイニーズ・クレオール等を含む多様な海外中国人の社会文化の実態、そしてそれらの人々のアイデンティティ形成過程と現状。
- (2) ホスト社会と海外中国人社会との相互作用及びそれによって生まれるアイデンティティの多様性（土着化／クレオール化／華人化）とその文化的特質の関係性。また、海外中国人社会との接触によるホスト社会の変容。
- (3) ホスト社会と海外中国人との相互作用、国民国家化、ローカル／グローバルの関係性から生じる、海外中国人が関わる民族カテゴリーとそのエスニック・ポリティックスの実態の把握。及びこれらから再構築される民族カテゴリーを事例として、文化人類学における民族論、クレオール概念について行う再考と新たな「民族」概念の提示。

| | | | | |
|------|------|------|------|------|
| 赤嶺 淳 | 板垣明美 | 市川 哲 | 甲斐勝二 | 桑山敬己 |
| 貞好康志 | 末成道雄 | 菅谷成子 | 芹澤知広 | 田村和彦 |
| 田村克己 | 中西裕二 | 信田敏宏 | 舛谷 鋭 | 宮下克也 |
| 宮原 暁 | | | | |

日本語組版研究

(主査：芝野耕司／所員 1, 共同研究員 8)

1980年代にワープロが普及するにつれて、当時のワープロが実現していた基本的な禁則処理を含むいわば原稿用紙レベルでの組版が普及の兆しを見せ、活版印刷時代の高度な日本語組版は危機に瀕していた。

この問題に対応するため、JIS X 4051 日本語文書の行組版方法を1993年に制定し、1995年及び2004年に改正した。また、2000年にはJIS X 4052 日本語文書の組版指定交換形式を制定した。

欧米での組版は、シカゴ大学のChicago Manual of Styleやオックスフォード大学のStyle Manualなど、組版とともに、正書法も含めたスタイルマニュアルが確立しているが、日本語に関しては、このようなものは存在しない。

こうしたことから、組版規則だけでなく、正書法も含めた日本語スタイルマニュアルを検討することが必要である。

居郷英司 枝本順三郎 小野沢賢三 小林 敏 逆井克巳
田原恭二 野村保恵 平松慎司

「植民地責任」論からみる脱植民地化の比較歴史学的研究

(主査：永原陽子／所員 1, 共同研究員 18)

近年の世界で奴隷貿易・植民地支配に対する謝罪や補償を求める動きが盛んになっていることを受け、「植民地責任」概念の成立にいたる旧植民地住民の歴史意識・歴史認識の変化に注目して、アジア・アフリカにおける脱植民地化過程を再検討する。狭義の「脱植民地化」の時期のみでなく、それに至る前史（ラテン・アメリカ諸国の独立、第一次世界大戦後の植民地体制の再編）や、最近の歴史意識の変化の中で生まれてきた「帝国」的結合の性格の変化にも目を向ける。

アフリカ、アジア、ラテン・アメリカの地域史の研究者とヨーロッパ帝国史の研究者との共同研究とし、年3回程度の研究会を行う。

浅田進史 飯島みどり 尾立要子 柴田暖子 清水正義
杉山優子 鈴木 茂 高林敏之 旦 祐介 中野 聡
浜 忠雄 平野千果子 前川一郎 溝辺泰雄 吉國恒雄
吉田 信 渡辺和仁 船田クラークセンさやか

ドイモイの歴史的考察

(主査：栗原浩英／所員 2 共同研究員 6)

1986年にベトナムで開始されたドイモイ（刷新）政策はベトナムの党・国家の諸政策（政治・経済・軍事・外交・文化等）、社会、国民の価値観のあり方に大きな変化をもたらしたが、すでに20年近くが経過しその成果と問題点も明らかになりつつあり、ドイモイを総括すべき時期がきている。

本プロジェクトはより長期の歴史過程の中にドイモイを位置づけることによってドイモイを総括することを目的としている。それは同時に、今やベトナムでも忘却の彼方へと追いやられてしまった集団主義時代（レ・ズアン時代、1957年～86年）を逆照射する試みでもある。

本プロジェクトは総括的なアプローチをとらずに以下の点に分析を集中し、ドイモイの本質的な部分と副次的な部分とを峻別して考察を進める。

- (1) ドイモイの起源
- (2) ドイモイをもたらした主要な動因とドイモイによる副産物
- (3) 1970年代末～80年代初頭（レ・ズアン時代末期）の諸改革とドイモイの関連性
- (4) ドイモイにおける社会主義的要素の比重（特に国営企業の役割）
- (5) 周辺諸国（中国・ラオス）の改革政策との比較、相互作用

石井 明 加藤弘之 白石昌也 鈴木基義 竹内郁雄
古田元夫

東地中海地域における人間移動と「人間の安全保障」

(主査：黒木英充／所員 3, 共同研究員 17)

東地中海地域は、商業・巡礼・移民など、古代より活発な人間移動と諸集団の交流の場を提供してきた。人類史上、グローバリゼーションのプロトタイプを最初に経験した地域といえよう。日常的異文化接触のなかで他者を受容し安全を保障するシステムについては、確固たる伝統の存在が認められる。

一方、現在の東地中海地域にはパレスチナ問題やキプロス紛争をはじめ、人間移動を伴う深刻な民族・宗派問題が多数存在する。これらの問題は、ゲーム論的な国際政治の枠組のなかで分析されることが多く、現地の文化的・社会的文脈のなかに位置付ける作業は軽視されてきた。

本研究プロジェクトは、人間の空間的移動と社会移動を総合した「人間移動(Human Mobility)」を鍵概念として援用し、民族的・宗派的に多様な構成をもつ東地中海地域の諸社会が、現在深刻な内部対立を孕む危機的状況に至った過程を検証するとともに、安全保障の規範や共存の論理を、人間移動の過程とそれを取り巻く環境のなかに発見し、「人間の安全保障」の議論に新たな視角を提供することを目指す。

| | | | | |
|------|------|------|------|-------|
| 白杵 陽 | 粕谷 元 | 北澤義之 | 栗田禎子 | 小副川 琢 |
| 佐藤幸男 | 佐原徹哉 | 澤江史子 | 土佐弘之 | 長沢栄治 |
| 中村妙子 | 間 寧 | 堀井 優 | 松井真子 | 村田奈々子 |
| 森晋太郎 | 家島彦一 | | | |

地球文明時代の世界理解と新しい倫理・人間観の研究

(主査：中谷英明／所員 10, 共同研究員 45)

現代世界は、一方では物心両面における比較的豊かな生活を保証すると同時に、他方では紛争・貧困・地球環境・疫病などきわめて大規模かつ深刻な問題を惹起している。

これらの問題は互いに関連しているから、個別的对症療法の効果は極めて限定的であり、新たな問題を引き起こすことも稀でない。したがってその解決には、まず、地球文明がいかにあるべきかという明確な未来像が根底になければならない。そしてそのためには、相互影響し合いつつ刻々に変化する複雑なこの世界を、物質・生物・人間の3層において正確に理解することが必要である。

往時には一人の哲学者が担ったこの現状俯瞰と新しい世界構想の営為は、科学の加速度的進展と諸地域の急激な変化を伴う今日の世界においては、一人の研究者が遂行することは殆ど不可能となっている。それは、人文・社会・自然の研究者の共同研究として、はじめて可能であろう。このような人文科学の新領域を「総合人間学」と呼びたい。

本研究は、以上の認識のもとに、「総合人間学」—自然と社会(地域)の最先端の知をひとつの場に集約し、それら諸現象の人間の価値を諸文明の精神伝統に照合して再検討しつつ、新しい世界観・人間観・倫理観の確立を目指す共同研究—の創出を模索するものである。

今年度は、研究会のほか、12月に国際ワークショップを開催する予定。国立民族学博物館およびフランスのMaison des Sciences de l'Hommeなどとの協同も計画中である。

| | | | | |
|-------|------|------|------|------|
| 朝倉 尚 | 池内 了 | 池田知久 | 池本幸生 | 石堂常世 |
| 逸身喜一郎 | 内山勝利 | 大津 透 | 丘山 新 | 小川正廣 |
| 桂 紹隆 | 柿木隆介 | 笠井清登 | 加藤進昌 | 河井徳治 |
| 黒田 彰 | 行場次朗 | 小島 毅 | 後藤敏文 | 塩月亮子 |
| 新宮一成 | 杉下守弘 | 杉本良男 | 関根清三 | 立木康介 |
| 垣川恵市 | 手島勲矢 | 長野泰彦 | 西川昌弘 | 納富信留 |
| 信原幸弘 | 林 信夫 | 林もも子 | 原洋之介 | 廣瀬通孝 |
| 広田光一 | 賽珠山稔 | 松尾剛次 | 三木雅博 | 村上征勝 |
| 守屋彰夫 | 市川 裕 | 日高敏隆 | 矢野 環 | 丸山 徹 |

国際シンポジウム

共同利用研究所としてのアジア・アフリカ言語文化研究所は、文部科学省「中核的研究機関支援プログラム」(平成7年度から13年度まで)により「卓越した研究拠点」(COE:Center of Excellence)に指定されて以降、学術研究の情報化、国際化にこれまで以上重点をおいた事業を展開しています。

国際化の面では、国内外の先端的な研究を行っている研究者を招聘し、国際シンポジウムを開催しています。本研究所が日本における人文社会科学の分野で先導的な研究を推進していく上で、国際的な学術交流は、今後ますます重要な活動となっていくことは間違いありません。

これまでに開催されたシンポジウム、及び平成16年度に予定されているシンポジウムは以下のとおりです。

| シンポジウム名 | 開催期間 | 参加者 |
|---|----------------|-------------------|
| 東南アジアにおける人の移動と文化の創造 | 1996. 12/ 3～ 5 | 国内 45名 国外 12名 |
| 音調の通言語的研究－声調の発生、類型および関連研究－ | 1998. 12/10～12 | 国内 45名 国外 16名 |
| 南アジアにおける言語接触と収束的発達 | 1999. 12/ 6～ 9 | 国内 43名 国外 17名 |
| 音調の通言語的研究－音調の発生、日本語アクセント論および関連研究－ | 2000. 12/12～14 | 国内 73名 国外 24名 |
| 非主格の「主語」をめぐって | 2001. 12/18～21 | 国内 95名 国外 29名 |
| 音調の通言語的研究－歴史的発展、音声学的基盤および記述研究－ | 2002. 12/17～19 | 国内 92名 国外 25名 |
| 境域社会のダイナミクス－東南アジアにおける国境地域の比較－ | 2003. 12/10～12 | 国内 81名 国外 10名 |
| インド系文字－過去そして未来－ | 2003. 12/17～19 | 国内 100名 国外 40名 |
| 人間の安全保障～いま「現地」に立ちもどって考える～ (地域研究による「人間の安全保障学」の構築プロジェクト) | 2004. 1/10 | 国内 250名 国外 2名 |
| アサバスカの再活性化における相互交流 | 2004. 2/16～18 | 国内 80名 国外 8名 |

| シンポジウム名 | 開催期間 | 参加者 |
|--|----------------|------------------|
| ネパールの社会政治動態 | 2004. 2/28～29 | 国内 40名 国外 6名 |
| 在臺灣發現日本～台湾における日本認識 | 2004. 3/27 | 国内 56名 国外 2名 |
| 北部南アジアの社会動態 | 2004. 6/25～27 | 国内 45名 国外 15名 |
| Thinking Malayness | 2004. 7/19～21 | 国内 70名 国外 18名 |
| 日本占領期ビルマの歴史的検証(1942-45) | 2004. 10/9～10 | 国内 83名 国外 2名 |
| (予定)レバノン内戦再考(1975-1990) | 2004. 11/3 | 国内 名 国外 名 |
| (予定)現代アラブ世界における歴史研究：マグリブとマシュリクから | 2004. 11/4 | 国内 名 国外 名 |
| (予定)音調に関する通言語的研究－歴史的発展，音声学的基盤および記述研究－ | 2004. 12/14～16 | 国内 名 国外 名 |
| (予定)9. 11後の世界における政治的暴力と人間の安全保障(地域研究による「人間の安全保障学」の構築プロジェクト) | 2004. 12/18～19 | 国内 名 国外 名 |
| (予定)在臺灣發現日本～台湾における植民地支配と日本～ | 2005. 3/5～6 | 国内 名 国外 名 |
| (予定)台湾原住民研究～日本と台湾、過去と現在 | 2005. 3/26～27 | 国内 名 国外 名 |



台湾南投県の山中では、高山茶（ウーロン茶）、キャベツ、水蜜桃等を急勾配の斜面で作っている。
このあたりは先住民のセデックの人々の集落があるところだが、開発を行っているのは、主に漢民族である。
(2004年7月30日 三尾裕子撮影)

外国人研究者招へい

本研究所は、国際的な学術交流・共同研究を推進するために、外国からアジア・アフリカの言語文化の専門家外国人研究者として受け入れ、研究の便宜を供与しています。比較言語文化論研究部門ならびに言語文化情報研究部門の情報開発分野は、外国人研究者を客員として受け入れるためのポストです。また情報資源利用研究センターにも外国人ポストが置かれ、センター員との共同研究が推進されています。このほか日本学術振興会や国際交流基金の招へい計画などで来日する外国人研究者を、随時受け入れています。この3年間に外国から受け入れた研究者は以下のとおりです。

(※は客員以外の研究員)

| | | | |
|------------------------------|-----------------------------|-----------------------|--------------------|
| 2002 | ※Joyce, Terry Andrew | イギリス | 心理学 |
| | ※Hanjabam, Surmangol Sharma | インド | 言語学 |
| | ※Oehler, Susan Elizabeth | アメリカ合衆国 | 民俗音楽・民族学 |
| | Sutjaja, I Gusti Made | インドネシア | 言語学 |
| | Edi, Suhardi Ekadjati | インドネシア | スンダ文学・スンダ研究 |
| | 周毛吉 | 中国 | チベット語研究 |
| | Live, Yu-Sion | フランス | 社会学・民族学 |
| | 朝克 | 中国 | 満州・トゥングース比較言語学 |
| | Wufela, André Yaek'olingo | コンゴ | 口承文芸学 |
| 2003 | ※Kari, Ethelbert Emmanuel | ナイジェリア | 言語学 |
| | ※Sudebilige, Shirnuut | 中国 | 歴史学 |
| | ※方素梅 | 中国 | 中国近代民族史 |
| | ※Hanjabam, Surmangol Sharma | インド | 言語学 |
| | ※Joyce, Terry Andrew | イギリス | 言語学 |
| | ※Oehler, Susan Elizabeth | アメリカ合衆国 | 民族学 |
| | Faucher, Carole | カナダ | 社会学 |
| | Gellner, David N | イギリス | 社会人類学・インド学 |
| | Kisseberth, Charles Wayne | アメリカ合衆国 | 言語学 |
| | Tirtosudarmo, Riwanto | インドネシア | 社会人口学 |
| | Leer, Jeffry Alan | アメリカ合衆国 | 言語学 |
| | 2004 | Razafiarivony, Michel | マダガスカル |
| Motingea, Andre Mangulu | | コンゴ | 言語学 |
| Mkude, Daniel Joseph | | タンザニア | 言語学 |
| Benhadda, Abderrahim | | モロッコ | 歴史学 |
| Witzel, Michael | | ドイツ | 言語学 |
| ※Christopher I Beckwith | | アメリカ合衆国 | 言語学・中央ユーラシア・東アジア研究 |
| ※Sangi Vladimir Mikhailovich | | ロシア連邦 | 言語学・口承文学 |
| ※Roberts-Kohno Rosalind Ruth | | アメリカ合衆国 | 言語学 |
| ※Massoud Daher | | レバノン | 歴史学 |
| ※La Minh Hang | | ベトナム | 言語学 |
| ※王菊 | | 中国 | 教育管理學 |

外国研究機関との共同研究

本研究所は、かねてより海外の研究機関と研究資料・情報の交換、研究員の相互交流、共同研究調査の実施等を通じ学問上の国際協力を進めてきましたが、最近はさらにこれらの機関のいくつかと正式に学術協定を結び、国際協力の一層の充実を図ろうとしています。これまでに学術協定を結んだ研究機関名と締結年および共同で実施した事業等は、以下のとおりです。

(外国機関名 (略号) / 締結年 / 国名)

国立科学技術研究機構 (ONAREST) (現・高等教育・情報科学・科学研究省 (MESIRES))

1978. カメルーン

文部科学省科学研究費補助金による現地調査「アフリカ部族社会の比較調査」(1969-76)におけるカメルーンとの共同研究を経て、カメルーン国立科学技術研究機構の人文科学研究所長を招へい、本研究所で協定締結(1978)。所員の現地における共同研究(1980-81, 82, 84, 86) : カメルーン研究者の現地調査参加(1982, 84, 86, 87, 89, 90, 91) : 本研究所におけるカメルーン研究者の成果刊行, 単行本 8 冊 (African Languages and Ethnography シリーズ), 論文 1 点 (*Sudan Sahel Studies* 所収)。

インド諸語中央研究所 (CIIL) 1987. インド

CIIL 所長本研究所訪問 (1983), 副所長来訪 (1985), 所員来所, 共同研究 (1984-85, 1991-92) : 本研究所所員 CIIL 訪問 (1982, 87, 88, 89, 91, 92) : 共同研究プロジェクト「南アジア諸言語の研究とそのデータベースの作成」を実施, 共同研究年次報告書発行 (1990, 91, 92)。

インド統計研究所 (ISI) 1987. インド

ISI 特別客員研究員本研究所来所, 共同研究 (1985-86), 経済研究部長来訪 (1988) : 本研究所所員 ISI 訪問 (1987, 88, 89, 90, 91) : 共同研究プロジェクト「電算機補助によるラビンドラナート・タゴールの言語の分析的研究」を実施中 (1987-) : 電算資料シリーズ 3 冊発行 (1987, 88, 90)。

チベット言語文化研究所 (LCAT) 1988. フランス

敦煌の古代チベット語文献のデータベース化を行なっているが、その一部の KWIC 索引は、*Choix de Documents Tibétains à la Bibliothèque Nationale III Corpus Syllabique* として、フランス国立図書館から 1990 年に出版された。

人文科学研究所（ISH）1988. マリ

文部科学省科学研究費補助金による現地調査「ニジェール川大湾曲部諸文化の生態学的基盤および共生関係の文化人類学的研究」を継続的に実施し、その成果を *Boucle du Niger: Approches multidisciplinaires*, Vol.1.(1988), Vol.2.(1990), Vol.3.(1992)として刊行した。

農業計画・経済研究センター（CAPES）1996. イラン

国際学術研究「イスラム圏における人間移動と共生システムに関する調査研究」の実施を契機に、将来幅広くイラン文化と日本文化に関する共同研究プロジェクトを組織する目的で研究協力協定が締結された。両研究機関の共同研究員に、研究員と同等の便宜と援助をおこなうことになっている。

情報文化省文化研究所（IRC）1997. ラオス

「シャン文化圏」プロジェクトを円滑に進めるため、ラオスとの共同研究を目的として学術協力協定が締結された。

インドネシア科学院社会文化研究センター（PMB-LIPI）2000. インドネシア

インドネシアの研究者との共同研究，セミナー，研究交流などの推進をはかるため，学術交流に関する申し合わせ。この申し合わせに基づき，2000年度より，国際学術研究「ボルネオとその周辺部における移民・出稼ぎに関する文化人類学的研究」による共同研究，研究セミナー，研究者の交流を実施している。



インドネシア、アロール島に数多く残されている銅製のドラム「モコ」

北ベトナムのドンソン文化の流れを汲むものとされている。アロールでは現在でも結納品として欠かせないものとされ、非常に高値で取り引きされている。

(2001年8月、Alor島Moruにて、塩原朝子撮影)



スンバワ島の結納の行列

新郎側の親族が結納品を手に新婦の家へ向かう。(2004年3月、Sumbawa島Pungka村にて、塩原朝子撮影)

図書資料コレクション

日本における唯一の、大学附置人文科学系共同利用研究所である本研究所は、アジア・アフリカ諸地域の言語文化に関する研究に必要な基礎資料を、1964（昭和 39）年の創設以来収集してきました。とくに海外約 50 カ国、150 研究機関とのあいだで、寄贈・交換により資料を継続的に集めています。現在、その総数は、図書 10 万冊弱、雑誌約 1,220 タイトル、マイクロフィルム 1 万余リール、マイクロフィッシュ 3 千余に達していますが、このほかにも古文書、地図、写真、ビデオや、さらには CD-ROM などのあらたな媒体もふくまれています。

このなかには、浅井恵倫博士旧蔵資料(台湾先住民関係の土地契約文書、動画、写真、語彙集、用例集、フィールドノート、参考文献類)のように、本研究所プロジェクトにより整理され、研究所ホームページで公開され、内外研究者の関心を集めているものもあります。またカンボジア語版南伝大蔵経は、カンボジアの戦乱により現地では散逸しましたが、本研究所蔵本をもとに複製版がつけられ、カンボジアの文化教育機関、寺院に寄贈されて、かの地の文化復興に貢献しました。さらに 19 世紀「カイロ石版画集」コレクションは、先年、中近東文化センターにおいて展覧会が開催され、注目を浴びました。

このほかにも、オスマン語劇場ポスター、ナポレオン「エジプト誌：第 2 版」、19 世紀末からのイランの主要新聞 65 種、19 世紀末に創刊されたベンガル語文芸雑誌のバックナンバー、中国清代の製糖法を伝える画集、清代台湾民俗図、清代モンゴル語仏典、ロシア帝国で出版されたモンゴル語聖書、清代公文書各種など、貴重な文献がふくまれています。三浦周行氏旧蔵品もふくむ、朝鮮王朝古文書類コレクションは、最近入手されたものですが、現在も収集が続けられています。

アジア・アフリカ研究における先覚者の個人文庫では、山本謙吾（満洲語研究）、浅井恵倫（オーストロネシア語研究）、小林高四郎（モンゴル史研究）、前嶋信次（イスラーム研究）、王育徳（台湾語・文化研究）諸氏の蔵書が保管されています。

今回の移転にともない、これらのコレクションのうち、一般図書、個人文庫類は附属図書館内に設置された AA 研コーナーに別置配架され、貴重書、参考図書、大型本、マイクロフィルム類、雑誌は研究所棟の 1 階にある文献資料室で閲覧できます。なお附属図書館 AA 研コーナーにある図書は、ほかの附属図書館蔵書とともに、共同研究員、研究生も館外貸出しのサービスをうけられます。

国立国会図書館のアジア関係図書は、関西館新設にともない移転しますが、その意味では、東洋文庫と並んで、関東地区における AA 研図書資料コレクションの意義と役割は益々重要なものとなりますよう。

なお、AA 研所蔵の図書資料の利用方法については、AA 研のホームページ (<http://www.aa.tufs.ac.jp/>) 及び東京外国語大学附属図書館 (<http://www.aa.tufs.ac.jp/library/>) のホームページをご覧ください。



競争的研究経費などによる研究

本研究所では、臨地研究、アジア・アフリカの言語文化に関する研究を展開し、また研究成果の情報化などをより一層推進する為に、通常の校費のほかに、「科学研究費補助金」や民間の財団による研究助成に積極的に応募して研究経費を獲得しています。また、最近では、民間機関などと共同で行う研究プロジェクトが発足し、研究成果のより実践的な応用等にも貢献しています。

以下で紹介するのは、所員が代表者になって行われている種々のプロジェクトです。

H16年度 科学研究費補助金プロジェクト

| 研究種目 | 課 題 名 | 所員名 | 採択期間 |
|------|---|-------|---------|
| 基盤 A | アジア・アフリカにおける多言語状況と生活文化の動態 | 梶 茂樹 | H13～H16 |
| 〃 | ボルネオ及びその周辺部における移民・出稼ぎに関する文化人類学的研究 | 宮崎 恒二 | H13～H16 |
| 〃 | 海外学術調査・フィールドワークの手法に関する総合調査研究 | 石井 溥 | H13～H16 |
| 〃 | 地方独立制移行期マダガスカルにおける資源をめぐる戦略と不平等の比較研究 | 深澤 秀夫 | H14～H17 |
| 〃 | 協調的ユビキタス言語運用 e-learning 環境の研究 | 芝野 耕司 | H14～H16 |
| 〃 | 未調査のバントゥ諸語および隣接諸言語の記述・比較研究 | 加賀谷良平 | H15～H17 |
| 〃 | 新たな東地中海地域像の構築—民族・宗派對立と人間移動 | 黒木 英充 | H16～H19 |
| 〃 | 東南アジアにおける中国系住民の土着化・クレオール化についての人類的研究 | 三尾 裕子 | H16～H19 |
| 基盤 B | 仏領西アフリカの植民地統治をめぐる住民側の記憶とその文字化保存に向けた調査 | 真島 一郎 | H14～H17 |
| 〃 | 1990年代半ば以降のイスラーム世界におけるジハード理論の変容と実践の研究 | 飯塚 正人 | H14～H17 |
| 〃 | ビルマ地誌フォーラム—企画・調査・試験的公開— | 澤田 英夫 | H15～H17 |
| 〃 | 東南アジア研究のための多言語文書処理システムの開発 | 高島 淳 | H15～H16 |
| 〃 | 複統合性をめぐる北東シベリア・北アメリカ先住民言語の比較研究 | 呉人 徳司 | H16～H19 |
| 〃 | 「植民地責任」論からみる脱植民地化の比較歴史学的研究 | 永原 陽子 | H16～H18 |
| 基盤 C | ヌートカ語に関する未発表言語資料の分析・処理および公開 | 中山 俊秀 | H14～H16 |
| 〃 | タイ東北部クワイ語の音声・音韻研究 | 峰岸 真琴 | H15～H16 |
| 〃 | キリシタン文献国字本総合データベースに基づく近世初期日本語用字規範の計量的研究 | 豊島 正之 | H15～H16 |
| 〃 | 東アフリカ牧畜社会における実践空間の認識と地図表象化：デジタル解析の応用 | 河合 香吏 | H15～H17 |

| | | | |
|------------|---------------------------------------|------------------|---------|
| 〃 | スルー海域世界におけるサマ語系民族集団の移動と越境に関する文化人類学的研究 | 床呂 郁哉 | H16～H19 |
| 〃 | 第二次世界大戦直後におけるソ連勢力圏の形成とスターリンの対外認識 | 栗原 浩英 | H16～H17 |
| 萌芽 | 民話研究におけるゲノム情報学の援用 | 小田 淳一 | H15～H17 |
| データベース | 「言語学大辞典」データベース | 町田 和彦 | H16～H18 |
| 特別推進 (COE) | アジア書字コーパスに基づく文字情報学の創成 (GICAS) | Peri Bhaskararao | H13～H17 |
| 若手研究 B | ウダヤナ大学所蔵バリ語ロンタル文献の転写・翻訳およびデータベース作成 | 塩原 朝子 | H14～H16 |
| 〃 | イランにおけるイスラーム法と都市社会 | 近藤 信彰 | H15～H17 |
| 〃 | オーストロネシア諸語における代名詞の数の体系の歴史的発達経緯の解明 | 菊澤 律子 | H15～H17 |
| 〃 | 電子化コーパスに基づくチベット語動詞データベースの構築 | 星 泉 | H15～H16 |
| 〃 | 言語学・文献学的観点から見た西夏とチベットの相関についての基礎的研究 | 荒川慎太郎 | H16～H18 |
| 〃 | 中期朝鮮語アクセント辞典作成 | 伊藤智ゆき | H16～H17 |
| 特定 | 象徴資源と生態資源への人類学的アプローチ | 内堀 基光 | H14～H18 |
| 〃 | 知識資源の共有と秘匿 | クリスチャン・ダニエルス | H14～H18 |
| 〃 | 小生産物（商品）資源の流通と消費 | 小川 了 | H14～H18 |
| 〃 | 中国清朝・民国時代の北京等都市における非漢語出版文化に関する社会史的研究 | 中見 立夫 | H15～H16 |

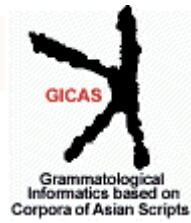
H16 年度受託研究プロジェクト

| 課題名 | 所員名 | 機関 |
|--------------------------------|-------|---------|
| 人文学分野に関する学術動向及び学術振興方策に関する調査・研究 | 石井 溥 | 日本学術振興会 |
| 地域研究による「人間の安全保障学」の構築 | 黒木 英充 | 日本学術振興会 |

H16 年度その他各種財団助成によるプロジェクト

| 課題名 | 所員名 | 機関 |
|------------------------------------|-------|---------------|
| 日本人文化人類学者によるフィールドワーク・データベース作成と特性分析 | 内堀 基光 | 三菱財団 |
| 清朝宮廷満州語史料冊の整理と研究 | 中見 立夫 | サントリー財団 |
| 日本占領期ビルマ(1942-45)に関する総合的歴史研究 | 根本 敬 | トヨタ財団 |
| 台湾における植民地主義—「日本」と「中華」をめぐって | 三尾 裕子 | 公益信託澁澤民族学振興基金 |

アジア書字コーパス拠点 (GICAS)



GICAS 「アジア書字コーパス拠点」は、文部科学省の COE 拠点形成・特別推進研究(COE)「アジア書字コーパスに基づく文字情報学の創成」(Grammatological Informatics based on the Corpora of Asian Scripts)によって平成13(2000)年～17(2004)年度の5年度にわたり約5億円の助成金を得て形成される「COE 研究拠点」の一つです。

GICAS 拠点が体系化を目指す「文字情報学」は、アジアにおいてとりわけ豊饒な「文字」を情報通信の基盤メディアとして捉え直し、ここに国際的な文字情報通信で求められる学問的基礎を与えることを目的とする新しい学問領域です。

GICAS は、研究所の従来の研究活動をいっそう拡充して、統計的解析を行うに十分な規模の資料体(コーパス)としてアジア各地に蓄積される書字文化資料の「アジア書字コーパス」を構築します。

各地に伝存する碑文・石経、諸宗教聖典の宮廷写本など、本文・字体の双方に規範を示すために作成された聖典書字資料はアジア各地に残存しますが、この電子化を中心とした「アジア書字コーパス」(Corpora of Asian Scripts)は、そこに投影されるアジアでの文字学問研究の伝統と文字使用文化の歴史の電子的な体现であり、「アジア書字コーパス」を現代の情報処理技術で実装することで、検証可能性を持つ新たな学問領域「文字情報学」の創成と体系化の基盤とすることができます。

「アジア書字コーパス」の実装は、文字情報処理に確固たる学問的基盤を与えることを意味し、これによって「アジア書字コーパス」に文字情報学の国際的レファレンス・センターとしての国際的な認知を得て、アジアの文化に根差した文字学研究・文字情報処理においても、我が国が主導的な立場に立つ事を目指すものです。

GICAS の活動は5年度中の4年目に入り、各メンバーが精力的に活動して、コーパスの構築・書字文化研究に努めています。

GICAS は独自のインターネット・ドメインを取得済です。GICAS のホームページは <http://www.gicas.jp/> で、そこにこれまでの研究成果などが公開されているので、是非ご参看ください。



資源の分配と共有に関する人類学的統合領域の構築

～象徴系と生態系の連関をとおして～

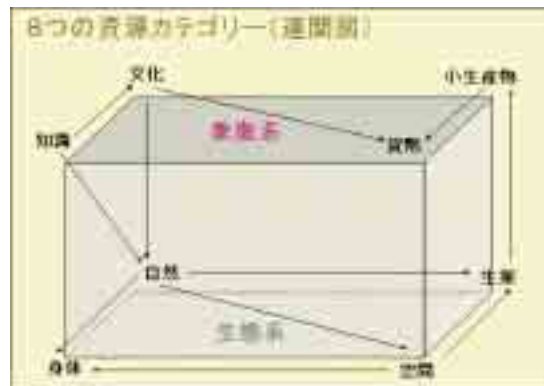
人類社会は象徴系資源と生態系資源という連関する二つの基盤のうえに成り立っています。この連関の様相を実証的かつ理論的に解明する人類学の新たな統合領域を構築することによって、天然資源のみならず、人工的二次的物的資源、さらには無形の知的・文化的資源をも包含する広義の「資源」の分配と共有をもって人類社会の根底的機序とするという視座を確立します。この基本的視座の確立は、地域社会、国家、あるいは国家を超える広域の人間社会の変容および適応という動態過程を統一的に分析することを可能にします。逆にまた視座の有効性は、こうした動態分析によって保証されます。本領域は、人類学に新たな可能性を拓くとともに、現代世界の周辺における動態的局面的根底的解明を目指します。

文部科学省科学研究費補助金「特定領域研究」として、平成14年(2001)～18(2005)年度の5年間にわたり行なわれる研究の成果及び活動内容については、独自のホームページ(<http://shigenjin.aa.tufs.ac.jp/>)にて公開しています。

－計画研究－

『象徴資源と生態資源への人類学的アプローチ』(総括班)

- 『文化資源の生成と利用』
- 『知識資源の共有と秘匿』
- 『小生産物(商品)資源の流通と消費』
- 『贈与交換経済における貨幣資源の浸透』
- 『自然資源の認知と加工』
- 『生態資源の選択的利用と象徴化の過程』
- 『資源と生態史－空間領域の占有と共有』
- 『身体資源の構築と配分における生態、象徴、医療の相互連関』



長期研究者派遣

アジア・アフリカの言語文化の研究にとって、各地域で話されているさまざまな言語の習得が必須であることは言うまでもありません。本研究所では助手等の若い研究者をそれぞれ2年の期間、アジア・アフリカの諸国及びそれらの旧宗主国に派遣しています。この現地投入は、言語を自由に話し、あるいは読み、書く能力を獲得すること、未だ研究がなされていない言語についての研究を推進すること、長期間現地の生活にとけこむことによって、その地域の文化や歴史の研究を深化させることを目的としています。この計画は1967年から実施され、現在までに合計38名が派遣されました。

- 1967-1969 石垣幸雄 (エチオピア), 守野庸雄 (タンザニア)
- 1969-1971 松下周二 (ナイジェリア), 家島彦一 (アラブ連合)
- 1971-1973 内藤雅雄 (インド), 中野暁雄 (モロッコ, 南イエメン)
- 1973-1975 福井勝義 (ソマリア), 中嶋幹起 (香港)
- 1975-1977 加賀谷良平 (ボツワナ), 湯川恭敏 (タンザニア, ザイール)
- 1977-1979 石井 溥 (ネパール), 藪 司郎 (ビルマ)
- 1979-1981 羽田亨一 (イラン, トルコ), 清水宏祐 (アラブ連合, イラン, トルコ)
- 1981-1983 山本勇次 (ネパール), 新谷忠彦 (ニューカレドニア)
- 1983-1985 辻 伸久 (中国, 香港), 水島 司 (インド)
- 1985-1987 中見立夫 (中国, モンゴル), 梶 茂樹 (ザイール, ケニア, ザンビア)
- 1987-1989 松村一登 (フィンランド, ソ連), 宮崎恒二 (オランダ, インドネシア)
- 1989-1991 林 徹 (中国, トルコ), 栗本英世 (エチオピア, ケニア)
- 1991-1993 栗原浩英 (ベトナム, ロシア), 峰岸真琴 (インド)
- 1993-1995 新免 康 (中国, 独立国家共同体, イギリス), 根本 敬 (イギリス, タイ)
- 1995-1997 飯塚正人 (エジプト, イギリス), 黒木英充 (シリア, フランス)
- 1997-1999 吉澤誠一郎 (フランス, イギリス, 中国, 台湾), 西井涼子 (タイ, イギリス)
- 1999-2001 澤田英夫 (オーストラリア, インド), 本田 洋 (韓国, イギリス)
- 2001-2003 床呂郁哉 (スペイン, オランダ), 呉人徳司 (アメリカ, ロシア)
- 2003-2005 陶安あんど (イギリス, フランス, 中国), 太田信宏 (イギリス, インド)



内蒙古のチベット寺院

(2004年9月、中国内蒙古、フフホト市にて。荒川慎太郎撮影)

言語研修

本研究所では、アジア・アフリカ地域の言語の修得のために、本研究所所員を中心にその言語を母語とする人、および日本人研究者を講師として、毎年夏、言語研修を開講しています（原則150時間）。これまで言語研修を実施した言語は、次の通りです。

研修言語名（修了者数）

| 年度 | 東京会場 | 関西会場 |
|------|-----------------------------|-----------------|
| 1974 | 朝鮮語(10), チベット語(12) | |
| 1975 | カンボジア語(8), ベンガル語(12) | |
| 1976 | ペルシア語(10), スワヒリ語(9) | ビルマ語(5) |
| 1977 | 広東語(14), マラーティー語(6) | モンゴル語(18) |
| 1978 | タイ語(12), トルコ語(12) | ペルシア語(13) |
| 1979 | ハウサ語(8), ビルマ語(14) | タイ語(7) |
| 1980 | ネパール語(14), モンゴル語(14) | ベトナム語(5) |
| 1981 | ヒンディー語(8), パシュトー語(10) | 中国語中級(26) |
| 1982 | アラビア語エジプト方言(12), ハンガリー語(17) | フルフルデ語(12) |
| 1983 | チベット語(12), フィンランド語(21) | パンジャブ語(8) |
| 1984 | ピリピノ語(タガログ語)(12), ヨルバ語(3) | トルコ語(15) |
| 1985 | 朝鮮語(14), カンボジア語(10) | スワヒリ語(8) |
| 1986 | 西南官話(5), タミル語(12) | ベンガル語(8) |
| 1987 | 中原官話(10), タイ語(19) | シンハラ語(8) |
| 1988 | ペルシャ語(10), トルコ語(16) | インドネシア語(6) |
| 1989 | ベンガル語(20), ベトナム語(9) | アラビア語エジプト方言(15) |
| 1990 | 朝鮮語(11), インドネシア語(11) | ペルシア語(14) |
| 1991 | エストニア語(12), ビルマ語(15) | 中国語(13) |
| 1992 | ネパール語(12), アラビア語エジプト方言(15) | フィリピノ語(12) |
| 1993 | 朝鮮語(17), グルジア語(17) | モンゴル語(17) |
| 1994 | ウオロフ語(9), ヒンディー語(11) | トルコ語(22) |
| 1995 | アムハラ語(5), チベット語(25) | 上海語(12) |
| 1996 | タイ語(14), 現代ヘブライ語(12) | ヨルバ語(7) |
| 1997 | テルグ語(10), モンゴル語(11) | ハンガリー語(7) |
| 1998 | アイヌ語(2), ハヤ語(11) | カンナダ語(5) |
| 1999 | フィジー語(4), ペルシア語(10) | ウルドゥー語(5) |
| 2000 | シャン語(3), アフリカーンス語(6) | ペルシア語(4) |
| 2001 | パシュトー語(7), 福州語(10) | ムンダ語(3) |
| 2002 | ネワール語(8), バリ語(7) | タイ語(7) |
| 2003 | マダガスカル語(11), スンダ語(5) | ベトナム語(11) |
| 2004 | ビルマ語中級(6), ベンガル語(11) | カザフ語(3) |

実施にあたっては、語学教育に造詣の深い所外の専門委員と担当講師および所員がプロジェクトチームを組み、教授法、実施方法や評価についての議論を行い、効果的な研修を目指しています。

研修は以下の能力の習得を目標としています。

- (1) 口語および書き言葉の能力をつける
- (2) 言語の科学研究と実際的応用の訓練の提供
- (3) 大学院相当の学生に野外調査を実施するための手段としての言語習得の援助

研修生は、大学などの研究機関を通じて全国から公募します。研修を修了した人には審査のうえ、修了書が授与されます。尚、本研究所は、名古屋学院大学及び清泉女子大学と単位互換協定を結んでおり、研修を修了すると、それぞれの大学の卒業単位として認定されます。

音声学解析

近代の音にかかわる科学，すなわち音声科学，音声学，音韻論等は音の物理量の測定と分析から始まり，その成果が現在の様々な理論に発展してきました。本研究所では，このような音の基礎研究に関する分析や実験が行えるように，様々な機器を備えています。

現在，本研究所に備え付けている言語音の分析機器の主力は，パソコンとそれにインストールされている音声分析ソフトウェアです。テープレコーダやマイクロフォンからの音声を一時パソコンに録音して，そのパソコン内の資料をソフトで分析します。パソコンには Macintosh と Windows が用意されています。

どちらの種類のアナライズソフトも，サウンドスペクトログラム，フォルマント周波数の測定，基本周波数の測定，音の持続時間，音圧測定等の音声分析に必要な物理量を自在に測定することが出来ます。連続した一つの音声資料(1ファイル)の録音時間は Macintosh でも Windows でも，44k 程度のサンプリングでほぼ1時間半から2時間録音できます。なお，このパソコンへの長時間録音だけに適したソフトも用意されています。パソコンの音声入出力装置としては DAT テープ，カセットテープ，DVD，MD，CD 等の媒体が利用できます。この他音声実験に必要な他の機器の導入も計画されています。また，現在は Macintosh には映像解析ソフトがインストールされており，VHS のビデオコーダを入出力装置として使えます。

なお，本研究所には，新キャンパス移転以前から，その時々日本における最先端の録音技術を用いて様々なアジア・アフリカの言語の語学テープを録音してきました。また所員をはじめとする研究者が野外調査で収集してきた世界の珍しい言語資料や，民話，民族音楽のテープやレコードも保管しています。新キャンパスへ移転後も，静かな環境で高品質の録音が可能な防音スタジオを用意し，録音機器としても DAT とカセットの高品質テープレコーダを備えています。

録音媒体の変換用機器も用意されている。すなわち DAT カセットテープ，アナログカセットテープ，CD，DVD，MD 媒体の録音が相互に他の媒体に録音できます。

これらの機器を利用するためのマニュアル類は実験室に用意されています。



台湾の先住民セデック族の女性

昔は，畑に行く道すがら，写真のように口で麻糸をくわえて手で縫っていたという。

(2004年7月31日 三尾裕子撮影)

大学院

東京外国語大学では、多元化した言語・文化・歴史・政治・経済などを統合し、かつ深く掘り下げうる教育者・研究者の育成という学術的な要請と、国際交流の高度化・複雑化に伴う高度な知識を有する国際的な人材や専門職員の需要に応ずるために、言語教育と地域研究をより高度に発達させた大学院地域文化研究科博士後期課程を1992(平成4)年度より設置しました。本研究所では教育体制のこうした発展に協力すべく、大学院地域文化研究科にAA研コース会議を設置し、21名(2004年度)の教官が参加し、言語学・民族学・文化人類学・歴史学などの分野における学生を受け入れ、教育活動に従事することとなりました。

これまで、本研究所の教官を主任指導教官として研究を行い、学位を取得した大学院生の氏名、論文題目、学位取得年月日は、以下の通りです。

学位授与者一覧 (AA研)

2004年4月現在

| 授与日 | 氏名 | 学位論文題目 |
|------------|--------------------------|--|
| 1995.3.24 | Ricard T. Jose | Food Administration in the Philippines during the Shortage and Occupation, 1942-1945: Focusing on the Rice Countermeasures |
| 1996.3.25 | 鈴木貴久子 | マムルーク朝時代の料理書『日常食物誌』を中心とするアラブ・イスラム世界の食生活研究 |
| 1998.3.26 | 吉枝聡子 | 現代ペルシア語の敬語行動に関する社会言語学的研究—テヘランの場合— |
| 1998.4.22 | Soysuda Naranong | 日本語の終助詞「よ」「ね」「よね」について—日本語教育の視点から— |
| 1999.3.26 | 榮谷温子 | アラビア語における限定・非限定の意味と機能 |
| 2000.3.24 | 米田信子 | マテング語の記述研究(バンツー系, タンザニア)—動詞構造を中心に— |
| 2000.6.21 | 小坂隆一 | A Descriptive Study of the Lachi Language—Syntactic Description, Historical Reconstruction and Genetic Relation— |
| 2002.3.26 | 鄧応文 | 1990年代における中越経済関係—国境貿易を中心に— |
| 2002.3.26 | 高久由美 | 漢字形成史研究—先秦時代の漢字体系における「説文留文」の位置付け— |
| 2002.7.24 | 菅原由美 | 19世紀中部ジャワ宗教運動研究—アフマッド・リファイ運動をめぐる言説— |
| 2002.12.18 | 禅野美帆 | 村落と都市の紐帯—メキシコ, オアハカ州サン・マルティン村のカルゴ・システム |
| 2003.3.26 | Kari, Ethelbert Emmanuel | Clitics in Degema: A Meeting Point of Phonology, Morphology and Syntax |
| 2003.3.26 | 黒澤直道 | 中国少数民族口頭伝承の研究—ナシ(納西)語音声言語の検討による「トンバ(東巴)文化」の再検討— |

日本学術振興会特別研究員 (PD&DC)

本研究所では、大学院博士課程修了者で、優れた研究能力を持つ若手研究者を、「日本学術振興会特別研究員(PD)」として受け入れ、本研究所の教員と共同研究を推進しています。また、本学地域文化研究科大学院所属の博士後期課程の学生の中にも、本研究所の教員を主任指導員とし、「日本学術振興会特別研究員(DC)」に採用されている学生が含まれています。今年度、本研究所に在籍する特別研究員は以下の通りです。

| 氏名 | 資格 | 研究指導者 | 採用年度 |
|--------|-----|-------|------|
| 青柳 かおる | PD | 飯塚 正人 | H14~ |
| 宮岡 真央子 | DC2 | 三尾 裕子 | H15~ |
| 児玉 茂昭 | PD | 高島 淳 | H15~ |
| 佐久間 寛 | DC2 | 真島 一郎 | H15~ |
| 井上 さゆり | PD | 根本 敬 | H16~ |

研究成果の公開

研究の社会還元

本研究所は創立以来、全国共同利用研究所として、国内の研究機関に所属する専門研究者に設備や資料を提供する一方、共同研究プロジェクト等の開催を通じて研究交流の機会を作り、日本における当該分野の研究進展に大きな足跡を残してきました。しかし、国際化の進展やアジアの著しい経済成長、またアジア・アフリカにおける民族・宗教対立の激化など、国際情勢の変化にともなって、本研究所の研究蓄積に対する一般社会の期待は年々大きくなっています。そこで、本研究所もこのような期待に応えるために、研究とともに、「教育」型の社会還元を実施しています。2001年度以降に実施した公開講座は以下の通り。

公開講座の実施

2001年度

本研究所主催「現代チベット語講座1入門編」(6月19日から半年：毎週火曜日に開催、講師：星泉)
本研究所主催「現代チベット語講座2読解編」(6月22日から半年：毎週金曜日に開催、講師：星泉)
財団法人東京都労務福祉協議会主催・本研究所後援「南西アジアの最新社会経済事情—イスラムの国々とインド」(7月：全8回16時間、講師：飯塚正人、内藤雅雄、町田和彦及び所外1名)
渋谷区教育委員会千駄ヶ谷社会教育館主催・本研究所後援「イスラム史」(1-2月：全8回16時間、講師：飯塚正人)
文部科学省主催「アジア—多様な文字へのまなざし：パートII」衛星通信による連続講座(エルネット)(2001年9月、10月 全3回 講師：峰岸真琴、星泉及びCOE非常勤講師1名)

2002年度

文部科学省主催「人・ことば・文化—ことばが消えるとき」「人・ことば・文化：海をこえて伝わったことばたち」衛星通信による連続講座(エルネット)(2002年12月 全2回、講師：中山俊秀、菊澤律子)
東京外国語大学言語学・音声学研究室主催・本研究所後援「言語聴覚士に対する言語学・音声学の再教育」(平成14年度、文部科学省社会人ブラッシュアップ教育推進事業、2003年3月9日、講師：峰岸真琴、報告書：「言語聴覚士に対する言語学・音声学の再教育」活動および調査研究成果報告書)

2003年度

調布市文化・コミュニティ振興財団主催(担当：大学開放企画室)「現代社会における宗教と生活 I—イスラーム世界に学ぶ多宗教、多民族共生の知恵」(11月6日より全4回、講師：飯塚正人、黒木英充、西井涼子、近藤信彰)
小平市花小金井南港民会主催、(財)中近東文化センター・AA研後援夜間講座「イスラーム世界を学ぶ」全10回(10月1日～12月3日の各水曜、AA研の担当講師：飯塚正人)
府中市生涯学習センター主催教養セミナー、AA研後援「イスラーム概観」(講師：飯塚正人)

2004年度

(予定)府中市生涯学習センター主催(東京外国語大学連携講座)「魅力あふれるアジアの言葉と人々 第1部—インドとアラブの言葉と人々」(10月6日より全4回、講師：町田和彦、中谷英明、黒木英充、飯塚正人)
(予定)府中市生涯学習センター主催(東京外国語大学連携講座)「魅力あふれるアジアの言葉と人々 第2部—東南アジアの言葉と人々」(11月10日より全4回、講師：澤田英夫、根本 敬、西井涼子、塩原朝子)

出版事業

本研究所では、言語研修、辞典編纂事業、個人研究、また共同研究プロジェクトによる研究の成果を出版物として公開しています。研究所の出版物は、著作者からの事前の文書による了解が得られている出版物に限り、「オン・デマンド出版」による頒布を行う予定です。詳しくは研究所編集出版委員会 (editcom@aa.tufs.ac.jp) にお問い合わせ下さい。

なお、出版物一覧については、別冊の『出版物目録』あるいは、ホームページの「研究所の刊行物」欄 (<http://www.aa.tufs.ac.jp/book/book.html>) をご覧ください。



- ・ 逐次刊行物
- ・ アジア・アフリカ言語文化叢書
- ・ アジア・アフリカ基礎語彙集
- ・ 言語研修テキスト
- ・ 言語調査・語学教育関連資料
- ・ 言語情報処理
- ・ 地域・文化研究：東アジア
- ・ 地域・文化研究：東南アジア
- ・ 地域・文化研究：南アジア
- ・ 地域・文化研究：西アジア
- ・ 地域・文化研究：アフリカ
- ・ 地域・文化研究：その他の地域
- ・ 地域・文化研究：広域

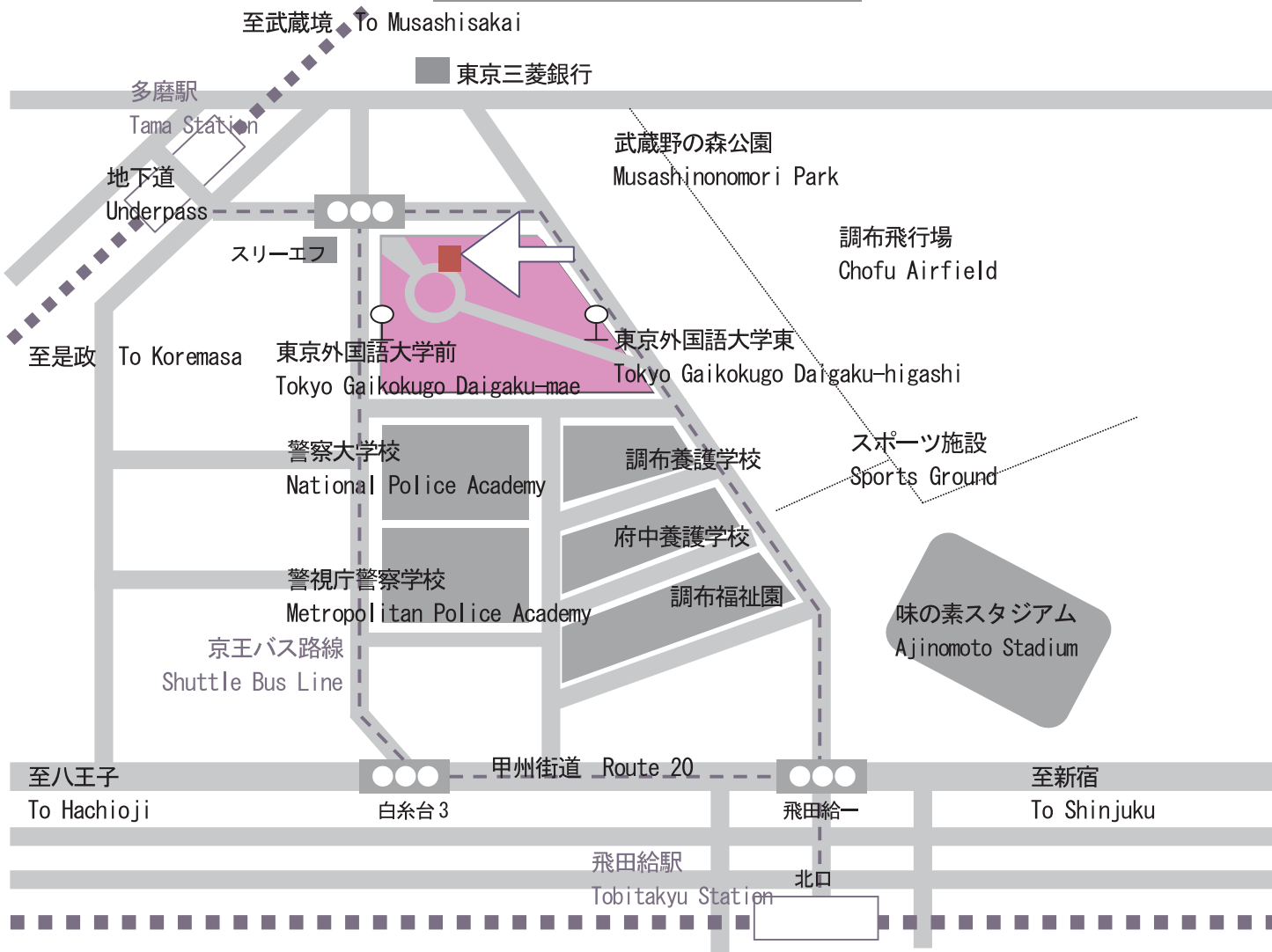
ホームページ

本研究所では、平成6年度からホームページを開設しています。本研究所の研究会の案内や研究活動の詳細、研究成果の出版物一覧など、最新の情報を提供しています。どうぞご覧ください。なお、個々の所員によるホームページも本研究所のホームページからアクセスできます。また、本要覧7～13ページにある「研究スタッフ」欄に掲載されたアドレスもご参照ください。

ホームページのアドレス：<http://www.aa.tufs.ac.jp/>

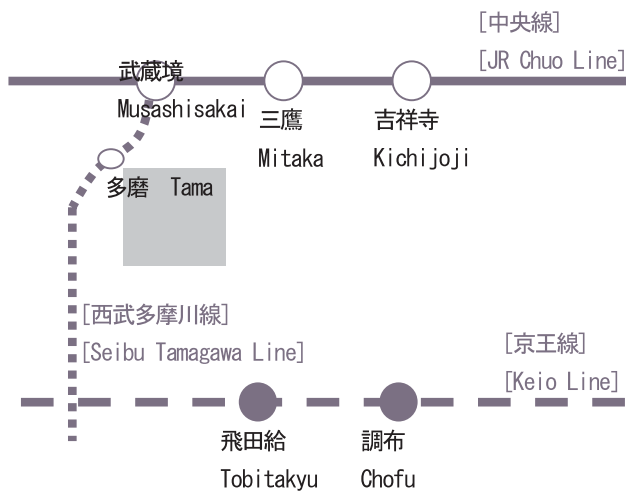


交通案内



【交通機関】

- 中央線「武蔵境」駅から西武多摩川線に乗り換え
→西武多摩川線「多磨」駅より徒歩5分
- 京王線「飛田給」駅より循環バス
東京外国語大学東停留所 下車徒歩0分 (バス所要時間約6分)
東京外国語大学前停留所 下車徒歩0分 (バス所要時間約10分)



アジア・アフリカ言語文化研究所
東京外国語大学

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1
TEL : 042-330-5600 FAX : 042-330-5610

